椰子樹五十号記念別冊特集号

目次

題字　故坂根嵯峨
絵　間部　学
刊行の辞……徳尾　渓舟　3
椰子樹五十号記念讃歌　1　5
椰子樹概史　統計に見る……吉本青夢：　9

椰子樹五十号記念賛歌……31
黎　明　以　前　の　記……池田　重二……38
思い出は遠き日に連なりて……坪内　廣代……45
みんな若かった……ささき　ふみ……49
忘れ得ぬ人々……秋野　愁……51
全伯短歌コンクール高点歌詠草……54
故舊忘れまじ……吉本　青夢……59
歌誌と歌集……68
同人作品抄1……73
随想……中山　稠子……109
発刊前後の思い出……瀬崎　濤聲……111
椰子樹と私……清谷　益次……113
誰が何を書いたか……吉本　青夢……（本文なし）
「燎　原」と「椰　子　樹」……河村　哉太郎……116
物故歌人作品集……119
物故歌人略歴……143
同人作品抄2……154
うしろ姿……渡部　南仙子……163
椰子樹記念号に寄せて……165
中江　克己　西田　秀子
阿部　栄子　川原　比露思
開沼　貴代　葛西　妙子
全伯短歌大会同人選高点歌詠草……178

刊行におくる……武本　由夫…１８４
編集余録……青夢…１８６

一九五八年六月発行

（文庫編集部注・原本には誤植が散見しますが、文中の短歌については、特殊な言葉づかいの場合もあり、よほどはっきりした誤植でないかぎりそのままにしてあります）

刊行の辞

我等が椰子樹誌の記念すべき五十号を迎えるにあたり、創刊号より当時者の一人として、微力ながら作歌すると共に、一期間、運営に携って来た私にとって、唯感慨無量の外なく、且つ二十年の歴史の跡を顧って想い新たなものがある。

本誌が創刊の運びに至るまで、その必要性は予てより痛感せられていた所であり、生まれるべくして生まれるの原動力となったのは、当時の総領事坂根嵯峨氏が赴任後逞しい作歌意欲を以って活動しそれにリオ正金銀行支店長の椎木文也氏文教普及会社会課の阿部青杜氏、加えて岩波菊治氏の近郊転住が中央歌壇を刺激し、此処に短歌雑誌刊行の機運に到達して、発足した我等は流派巧拙を問わず、相互融合して作歌に精進することををモットーとして、ブラジル曠野の一角に日本の傳統文学の種子を培って来た。

爾来、二十星霜を経過した間に、忌まわしい戦争時代に依

る空白時代があり、時に財政的な磋跌もあって、定期と云えなかったにしろ、兎に角迂曲しながらも今日まで継続して来た事は偉としなければならないが、それに付いても思うは椰子樹の産みの親達である。前記の先輩の内二氏は既に世に亡く、二氏は遠く祖国に去り、亦初期に活躍した有馬の人々もそれぞれの渾命に従って、一人逝き一人退き、今はその後継者の犠牲的努力に依って、辛くも発行が維持されている状態となったが、勿論その蔭には変らぬ同人誌友の支持が有ればこそである。翻って私個人を見るに、嘗て作歌に火の如く熱情を燃やし、椰子樹の発展に一臂の力を假して来たが、現在は完く疲労していると云った状態にあり、その点　歌友諸兄姉に辨明の余地は無く、半面舊き部類の私の出る幕でも無いと思われ、新しい椰子樹は新しい人々手に委ねられるべきであり、こうした人々の熱と作歌力に今後の椰子樹発展を待つべきでは無かろうか。私は蔭ながらその前途を祝福しながら見守って行きたい。

徳尾　溪舟

椰子樹五十号記念讃歌

五十号重ねし椰子樹祀ふとき思ひ新なり岩波先生

安部　栄子

若きらが寄りて映画「佐久間ダム」を蔑す佗しく我は聞きゆく

吹本　菊子

無遠慮に日本人を罵りて時にわれに視線を合はす

東野　暁風

ためらひの長き刻経て面向けし眸幼なくうるみてゐたり

弘中　千賀子

かに蘭の節々の芽の幼くて生きるに脆き性を思へり

本庄　研一

遙けくもまた須叟の間と思ひ泌むともに辿り来しこの二十年

開沼　貴代

椰子樹將来の像はっきり描きつつ命名せりとふ君の戀ほしも

葛西　妙子

幾十域の芋畑うめてパライーバの河水は晝陽に光りて黒し

片岡　けい子

哀歓をこめたるふるき吾が歌を生の證の如く讀み居り

川原　比露思

街路樹にいまだ雫の垂りながら一時つづきゆく乗用車

河村　哉太郎

新しき年を迎へし共感は一堂に會ひてことほぎしとき

光　南極

轉々せる吾が移民歴の悲しみは訪ふことなき子の墓二つ

越村　定雄

山の端に陽は沈みゆく直線の空堀の中にかげり満たして

小竹　清子

うつり来て植ゑし若木の椰子の葉の亭々といま庭を風靡す

中山　稠子

若きらと競ひて喰ぶる枝豆のかかる味覚も郷愁の中

行方　正治郎

騒ぐごと夏の雨すぎ牧の青空気に染み見ゆ午の陽が照り

南條　由喜夫

五十号つひに迎へし椰子樹誌よただおほらかな歩みにあらず

西田　季子

創刊号が出た頃吾はグループの二年生なりしレジストロにて

則近　正義

口悪き男と言ひつつ思ひ出づる幾度か彼におどかされしこと

大場　時夫

恵まれし生活と云ふに遠けれど歌に依る時しばし安けし

大島　進

椰子樹五十号いづると聞けば自ら目に見えて来る君がまぼろし

瀬崎　濤聲

国籍の異る父は望郷をおさへて二世の子らと働く

玉木　五男

谷の間の泥臭き菜園に佇みて農に苦労せし遠き日想ふ

梅崎　嘉明

たはやすく鶏の首抜く妻にして銀婚式のことなどを言ふ

渡部　南仙子

あるときの佐官の居らぬ寺院の塔ウルブが二三羽天窓にをり

八巻　梅夫

両車輪下しをへたる旅客機が下降はじめたり夕映えの中を

米川　久

椰子並木つきるあたりに海見えて汗あえし我にひびく潮騒

米澤　幹夫

流れゐし雲も静まる夕べにて去りしも今もなべてかなしき

吉本　青夢

椰子樹概史

統計に見る

吉本　青夢

椰子樹は一九三八年の十月に創刊された。その間、世界戦乱による五か年余の空白時代を経たが、渋滞しながらも昨年の一月発行で五〇号に達した。ちょうど今年で二十年になるわけである。五〇号までに掲載された作品は、総計一七八一二首という予想外に大きな数字を示している。（これには転載、再録、引用、歌會、競詠、題詠、入門、質疑、追悼、賛歌などの作品を除外した）その詠者は延人員にして三七一二名となるが、明細に調べると、實質的には五四六名が発表したことになる。なお同人と他の誌友投稿者を分割した内訳は

同人　一〇〇名　一一〇三四首

その他　四四六名　四三八八首

の結果となり、これらの一人あたりの平均率は同人は一一〇首強、その他は一〇首弱となっている。

まず同人級の作歌活動の實績に列挙してみよう。作者名の多くは判明している限り現在の使用名にしたがい、舊名または別名は括弧内に示した。×印は物故者、〇印は現在同人、この中には五十一号以後に推薦された新同人九名を含む。（なお戦前、同人の列に入っていたが、まったく詠草を寄せ

なかった五名を除く。）上段の数字は掲載回数下段は合計歌数である。

×岩波　菊治　二七　二四七
椎木　文也　一五　一五二
×坂根　嵯峨（花瀬群濤）　七　八六
阿部　太（青社）　一〇　一一六
○瀬崎　濤聲　四〇　三二二
○行片正治郎　三三　二六三
渡部　南仙子（但野拾参）　六　二九
○池田　重二　三　二二
石井　繁美　一　七
○武本　由夫　五〇　三四〇
阿部　芳治（素堂）　二　一六
三室映之助　一　五
○徳尾　溪舟　三五　三〇二
○葛西　妙子　五〇　三六〇
○開沼　貴代　四二　三〇三
富吉　好人（石竹花）　四　二三
住吉　光雄（秋野愁）　五　三〇
×樋田沙子　一〇　六八
×荒木　八雲（冷果）　四　二六
○坪内　廣代　一八　一〇六

須貝さだめ（ささきふみ）　五　二九
三浦（木村）芽里　四　二一
○不二山南歩　二七　一五〇
樋田　陽荘　五　二二
○吉本（鴨川）青夢　四三　三〇〇
波沫　正夫　一一　五五
○西田（横地）季子　三三　一九九
○河村哉太郎　三七　二四七
○天津　夢城　二三　一四二
中須　夏山　四　二三
小田切　劒　二　一三
○安部　栄子　三七　二〇二
○中山　稠子　四六　三五八
○井本　淳　三四　二三二
渋川不二夫　四　二四
×今本　義美（金鐘兒）　一〇　七二
金子　秀雄　二　九
沖田（隠岐田）春陽　八　二八
晶山　充　二五　一四七
×山本　弧愁（龍男）　一〇　一二九
○唐澤（原）恵津子　二四　一二三
○清谷　益次（水聲）　一九　一三六
○脇坂　一　二六　一七九

牛窪せいし（星泗）　二六　一三一
○別府　二郎　二三　九三
○川原比露思　四四　三二二
遠山　湍水　二　一一
×長友　安徳　三五　一六七
○上村登志行　一二　五六
○中江　克己　八　四五
石井　衣子　七　五二
×武田　公平（生田静夫）　一三　七一
○仲眞美登里（仲麿）　五　二三
淺田今日志　一五　七八
○酒井　繁一　一八　一四三
○大原　友重　二二　一二三
○本庄（眞木）研一　二三　一三九
○大場　時夫　二二　八八
古澤　典穂　四　一三
○米澤　幹夫　二七　一三一
八巻　培夫（魔朱王）　四　二一
○則近　正義（農文士）　三四　二〇五
×伊藤　次郎　一一　六〇
×中井　小鴨　二〇　九八
奥田　葉吉　七　二四
○上野　紅陽　一四　七七

○光田ひさを　二四　一四四
○安良田　濟（岸・狭間）　一六　七九
○谷（則近）佐稚子　一九　八〇
小島　正徳（鴎人）　一一　四七
×瀧澤　正　五　二三
○光　南極　三三　一九七
○中井　芙蓉　二五　一六四
○米川　久（久米川照明）　三〇　一五四
○東野　暁風　三四　一九四
池田　喜城　五　五七
○南條由喜夫（長島可山）　二九　一五七
小林　鶉尾　三　二七
○戸崎　清作　二一　九六
○簀藤　勝子　二四　一一五
○吹本　菊子　二九　一二一
○玉木　五男（一櫻）　一九　一〇三
○弘中（佐伯）千賀子　二四　一〇四
○梅崎　嘉明（亮）　二一　一〇八
○越村　定雄　一一　四九
○高林　明雄　一八　一二〇
○小竹　清子　三五　一六六
○森重　扶美　二四　一五〇
○坂　光男　二一　一一八

山路　舜一　一九
○志村　良一（石田周三）　一三　五七
○阿部パウロ　一一　四六
○西田　孝徳　一三　五九
○紅月　伯舟　一一　五八
○新納　潤魚（黒木千房）　七　四四
○平松　霞　一七　一〇六
○片岡　けい子　一三　九七
○小笠原富枝　一〇　七一
○八巻　梅夫　八　四〇
○大島　進　七　三八

以上の表示によって、各同人は自己の作歌量を見ることができるが、物故者を例外としていかに持続の至難であることを知る。創刊号とともに同人になった者は三十四名、その中に名實ともに歌人として現存している者はわずか六名、したがって随時加入した同人にしても、今なお作歌している者は全同人の三〇パーセントにすぎない状態である。全巻を通じて無欠詠作者は、武本由夫と葛西妙子の二人、いすれも昨年の全伯短歌大會の席上にて表彰されたが、この熱情と精神力には頭をさげなければならない。ついで回数では中山稠子、川原比露思、吉本青夢、開沼貴代、瀬崎濤聲の順となり、歌数も三〇〇首以上となっている。また歌数と回数の割合を見

ると、三十九号以後は発表しなくなった徳尾渓舟が、平均九首弱となり、瀬崎が八首強となっている。

つぎに他の誌友作者を調べてみる。全作者を奉げるには紙数がゆるさず、一〇回以上を列記して、残りは総括して小計にとどめた。これも同一人で別名を使っている点がつまびらかでなく、重複しているむきがあると思う。回数と歌数を添示して発表順にならべた。

富岡耕村（１７・五二）　玉木梅（４０　一二三）
小石ひろし（１４・四九）　木下緑蔭（１１・三〇）　早川千代子（１３・四四）　志津野華繪（１３・五五）　中河信（１９・八九）　櫻井健三（２５・七九）直木新（１４。四九）
中井すみれ（２３・七〇）　宮本三春（１３・四二）　小笠原正好（２８・一一六）　竹山伊知呂（１０・三一）　牟田利雄（１５・五九）　田中八重（２６・九一）　田邊道子（１０・五一）恩村實紀（１１・四〇）　小林寂英（２４・八三）　仙田ます子（１２・四二）貞一（１９・七五）　平川忠（１６六五）荒川豊水（１０・四〇）　瀧秀一（１０・二七）　井出ひろむ（１７・五八）　岡本早實（１１・四三）　加藤政吉（１５五一）島田晋（１３・五六）樋由玲子（１１・四五）　茂樹よしの（１３・五〇）　春名景水（１２・五二）　三浦久和子（１３・五二）　三牧はら（２１・八七）　青木只男（１６・五七）　國松英輔（１３・四〇）神田笹浪（１８・八二）　藤

田美砂子（１５・四九）　森重羊鈴（２５・一〇〇）　竹林光（１２・四〇）　風間慧一郎（１３・六三）川口久藏（１６三八）　近昇（１２・四〇）　浅田正義（１３・四五）　南崎稚草（１０・三二）　吉本悟（１９・七五）正木思水（１４・六八）　坂壽一（１６・八〇）　細川末葉（１４・五九）佐藤一英（１２・四一）　三好案山子〔１３・四九）立筋昌子（１０三四）　中田武男（１３・六一）　陳内しのぶ（１１・四二）　清水節子（１４・六三）村手千恵（１０・四二）　植村かす（１４・五三）室伏誠治（１４・六一）岩波とめ（１１・三三）土井賢太（１２・四三）　重道千代千子（１２・四〇）　渡部チエ（１３・五一）三浦重雄（１１・四〇）

以上　計　六一名　三三八九首。

９回・兒島勇　柳敏彦　草野しげる　高橋捗　葛原竹男　儀武武郎　越村由起子　黒田鶴子　横山敬男　斉藤貞子　古繹千代子　増田小葉

８回・大原太一　本田藪艮　高峰千秋・上原知水　望月喜恵子

７回・末藤千種　一木蘚花　木村湊　紫陽草　小野寺養太郎　竹己　横山耕人　伊藤安月　上村正吉　杉田まり夫　緒方新男　住田一枝　山口忘我　大澤愛子　中津井紫蕗

６回・沙美汀月　濱田良１郎　西出冬山　竹野千代子　穂波重松純造　三浦朝江　柳龍寵三　西灘攝　津夫　福島幸子　矢坂行男　原田満典　野口一郎　山本佐敷　長尾多計志

原由牧草

５回・二五名　４回・二六名　３回・三五名　２回・六五名
１回・一八六名　計三八五名　九九九首。

以上の四四六名の中に、はたして幾人が継続しているだろうか。試みに指摘してみると、五〇名にもおよばない寂然たる数字になる。誌友作者は量的に多いだけ新陳代謝もはげしく、一回のみの投稿者が一八六名とはおどろきである。もちろん最近の初心者も含まれているが、その人たちは将来に可能性を持っているとして、ほとんどが気まぐれの投稿者というより外はない。こうした傾向は新聞歌壇の上でも同じである。最初の八名は戦前よりの古い作者であるが、特に玉木梅は今なお不断の精進を続けている。力量はとにかくとして、その存在はもっと重視さるべきであろう。

またたくましい作歌意欲を持ちながら、同人級につらならないうちに後退した者が、十指にあまるのはなんと言っても惜しまれる。

椰子樹の歴史は統計数字によって、ほぼその経過を知ることができるが、もう少しくわしく号を追ってのべることにしよう。椰子樹の変還をおよそ三期にわかつことができる。戦前の第十二号までを第一期とし、第二期は岩波菊治の逝去の年、続いて現在までをまず第三期と見てよかろう。（則近正義はかつて「椰子樹三十号まで」執筆しているが、それには

戦時中の林泉時代を第二期として、すべてを四期間に区別している）

創刊号は待望に答えるだけのりっぱな体裁と内容を持っていた。トップの詠草欄に岩波、椎木、花瀬（坂根）、阿部を据え、抽雲集には瀬崎、行方、池田、武本、徳尾、葛西、開沼、富吉、秋野、樋田、荒木、坪内、木村、須貝、不二山など、いずれも当時そうそうたる歌人をならべている。続く十月集の一と、二の選歌欄には三十六名の作品が出ているが、この中で現在も踏み止まっているのは、わずか吉本、西田（横地）、河村、天津の四人のみである。なお選者の阿部青杜が自分の教え兒らに、俄か仕込みの歌を作もせ、それぞれ美保洋子、青葉涼子、白峯雪子、青野露子などと、ヅカ女優の源氏名みたいな雅号をつけさせているのもおもしろい。

第二号になると、俄然ページに作者と歌数がふえて、中山稠子を初め井本浮、安部栄子、山本孤愁、晶山充、唐澤恵津子が登場した。この号に新しい試みとして親詠欄が設置されて、中堅作者数名が選に当たり、坂根嵯峨の短冊が賞品に出たがどうしたものか、六回の発表で後が続かなくなった。

第三号での初投稿者清谷水聲が岩波選の筆頭を占め、ついで脇坂一、また天津と、阿部選でも今本や河村が佳作をもって台頭した。選歌欄では川原此露思、別府二郎、長友安徳、上村登志行が見え出した。清谷はその後めざましい躍進を示し、葛西とともに詠草二に転じてしまった。この次年度は四

回の発行となり、まず順調というべきであった。なお創刊当時に比べて投稿者数は減少したが、質的には進歩を示して、第四号で清谷、波沫、遠山、今本、河村、山本、天津、脇坂の八名が新しく同人に推薦された。続いて田中正實、牛窪星泗が加盟した。前者はこのころ松風と称し、ブラジル時報歌壇の選者であったが、遂に椰子樹には協力しなかった。三年度の第六号には、アルゼンチン在住の石井衣予を第一詠草に迎えた。佐々木信綱の「心の花」に属していた逸材である。この号は第一期ではもっとも豊富に作品が盛られた号であり、阿部青杜が「聖戦を想ふ」と題する一連二十二首を発表した。当時は日支事変がますます擴大して、アメリカとの国交も険悪をきわめていた。また山本弧愁が前号についで「病床雑吟」をやはり二十二首も載せている。この作者は肺をわずらい久しく闘病中であったが、惜しくも戦時中に不帰の客となった。第一期でも最高の作品を発表した力作家であった。一九四〇等の第七号は、遂に坂根嵯峨の送別特集号となった。椰子樹の誕生と経営に多大の努力を尽くし、コロニア短歌界の発展に一転機を招来したが、宮仕えの官職はどうにもならない。任期わずか三年に満たず、コロンビア駐在公使として栄転した。そればかりではなく、阿部青杜も前触れなく突然に帰国した。両先進を同時に失った椰子樹は少なからず痛手を受けたが、やがて瀬崎が第一詠草に座り、岩波は一人で休刊になるまでの選歌をすることになった。この号で

は大正末期から昭和初期にかけて、コロニア歌壇の輝ける明星とたたえられていた大花きみのが帰り咲いた。しかし久しい空白にはずれがあり、また気迫も鈍っていたためか、期待するほどの作品を見せず、ただ四回の発表で消えてしまった。第八・九号従来の半分ページに縮少した。全五〇号を通じて一番うすぺらなものである。これは欧州戦乱の影響により紙値暴騰し、印刷費が旧倍になったためであり、新加入者の微弱と同人誌友の滞納も原因をなしている。これは現在も変わりはなく、当時は同人費は年三十ミル、誌友費が二十ミル、印刷に至っては四百ミルそこそこという、今から思うと夢のような時代であったが、それでも椰子樹は常に経済難に喘いでいた。会計担当富吉がマリリアへ移転した後は、徳尾が職掌がらこれを受けつぎ、現在の中江に譲渡するまでの長い期間、いわゆる五〇号に達する苦しい台所をまかなって来たわけである。また編集も当初より武本が全面的にたずさわり、再刊後は一期間を則近にゆだねたが、ふたたび就任してやはり五〇号まで務めて来た。とにかく徳尾と武本はいわば椰子樹の二本の支柱であった。一九四一年は特記すべき年である。そのころブラジル政府は法令によって外国語の印刷物を発禁しており、各邦字新聞はすでに影をひそめていたが、歌人は世情にうとく椰子樹はどうやら難局を切りぬけていた。七月に第十号、第十一号は十月発行が遅れて十一月に出て、まだ次号の刊行に何らの杞憂も感じていなかったやさき

文字どおり突如として、日本は真珠湾の急襲とともにアメリカに宣戦した。これで第一期を終えて休刊のやむなきに至ったわけであるが、その間に出て戦後は同人としてめざましく活躍した歌人は、武田公平、浅田今日志、酒井繁一、大原友重、本庄研一、八巻培夫、則近正義、伊藤次郎であった。

日本の悲惨なる敗北によって世界的戦争はピリオドを打った。在ブラジル邦人もどうやら陽の目を見るに至ったが、その間はまったく忍従の数か年であった。戦後ようやく二年目、一九四七年の五月に再刊の機運に恵まれたが、それまでの下地を作っていたのは、戦時中モジにあった林泉短歌會であった。岩波を中心として武本、則近など、あたかも使徒のごとく弾壓下にひそみ、小誌「林泉」を刊行していたのである。これは椰子樹の歴史を語るに除くことのできない一ページである。

かくして復活の第十二号は出た。いまだ地方歌人との連絡がつかず、かつ資金の調達に渋滞していたので、ほそぼそながら再刊初年度の三冊は、武本が犠牲的に鉛筆を握って謄写版刷りにした。表紙だけは南米時事新聞社経営の同人仲眞美登里の好意により、体裁だけは従来の意匠を保っていたが、第十三号の如きは作者三十五名、掲載歌数一四〇首という貧弱なものであった。その後は漸次、号を追うに従って上昇して来た。それは戦時間の抑制に対する反動というべきか。まず短歌熱に拍車をかけたのは、各新聞機関が歌壇をもったこ

とである。パウリスタは岩波、南米時事は瀬崎、日伯毎日は武本が選者になるや、無数の新舊歌人が馳せ参じた。雑誌としては酒井の主宰で「新世紀」が生まれ、小田切劒が歌壇を担当したが、いれゆる三号雑誌で消え失せた。またビリグイから佐藤貞一編集の「青桐」、プ・プルデンテに長島可山の「和滴」が現われたが、前者は六号で終り、後者は十八号まで続いた。なお戦後いち早く復活あるいは誕生した短歌會は、サンパウロを初めとしてモジ、プ・プルデンテ、カフェランジア、リンス、アリアンサ、サントポリスなどがある。こうした地方短歌會の呼応と協力は、必然的に椰子樹を発展にみちびいた。

一九四九年の二月に、パウリスタ新開社主催、椰千樹の後援のもとに、第一回全伯短歌大會が開催された。これは同時に岩波菊治の五十歳誕生辰の祝賀を併せたものであるが、詠草は一人三首で約三百首にのぼり、出席者は六十名を算する盛況を見た、成績は主賓の岩波が最高点を獲得、たついで吉本、清谷、川原の中堅作家がくつわを並べて入賞した。この特集を組んだ第十九号は、創刊以来初めての増大号となった。そのころの陣容は第一詠草にアルゼンチンの池田喜城が参加して、清谷と吉本が上昇した。選者は戦前より岩波一人であったが、新しく瀬崎が担当することになり、同時に両選者による推薦欄からは、優秀歌人が出現して同人の数も増して行った。この号は作品も四五〇首におよび、ようやく活気

をとり戻し軌道に乗って来た。一方すでに刊行されていた娯楽雑誌「よみもの」に歌壇が創設されて、徳尾、清谷の共選にて新人の養成につとめた。また小田切がみずから「南米短歌」を出したが、ご多聞にもれず四号で没落した。一九五〇年に入ると、第二十二号は遂に伊藤次郎の追悼号となった。それまでに物故した同人は坂根嵯峨、山本弧愁、今本義美、樋田美沙子、瀧澤正であったが、これが最初の悲しむべき故人の特集である。第二十三号からは第一回の短歌入門欄が設置されて、行方がこれを担当し、初心者の作品の添削と、質疑について懇切なる解答を與えることとなった。第二十四号は三好案山子の日本荘に、佐々木信綱と坂根嵯峨の歌碑が建立された記念号、続く第二十五号はふたたび第二回全伯短歌大會特集となった。この年より坂根賞が企画されて、その第一回は抒情的な海の歌をもって新しい境地を拓いた吉本が受賞した。ついで翌年は井本淳が獲得、川原比露思、河村哉太郎と、四回にわたって授賞されたが、一九五四年以後は該当する作者なく、遂に作品募集による椰子樹賞に切りかえられた。これに先きだつ四月末には、ロンドリーナにおいて第一回北パラナ短歌大會が催され、一週間を経てプ・プルデンテで第二回汎奥ソロ短歌大會が開かれた。これには瀬峰、徳滝、武本、池田、仲眞、吉本が空路出席した。かくして前年より発足した地方短歌會は、アサイ、ポンペイア、スザノ、南聖、ロンドリーナ、ウライ、バストス、カンポス、アララ

クワラであり、すでに活動している短歌會と合せて十六をかぞえ、その擁する会員は二百名に達するに至った。そのころ母国の「アララギ」に武本、上野が初入選して以来、開沼、大原、晶山、則近などが水準の高い作品を投稿し出した。この年度は別掲の統計表が示すとおり、特に第二十四、二十五号のごときは、百名の作者を突破して、歌数も五百首を超過する成果をおさめた。実にこの期間が椰子樹史上の黄金時代だったと言えよう。

前年度の相つぐ増大号の刊行と、急激に印刷費が暴騰したために、第二十六号は予定よりわずか年おくれ、しかも三十二ページという小誌となって、その縮少のまま二年間に続いた。だが内容はむしろ向上して、ここあたりがふるいに残った堅実な作者が揃ったと言える。十月に例年通り開催された第三回全伯短歌大會には、従来の高点歌、総得点に同人選が加えられ、それに第一席を獲得した西田季子は、同時に汎ノロエステ短歌連盟夫催による、第一回全伯短歌コンクールにも受賞して、女性の先鞭をつけて大いに気を吐いた。また地方短歌大會はパラナ、奥ソロ、バストスにて開かれ、岩波、瀬崎、清谷、則近が巡歴した。カンポスでも酒井の肝入りで第一回を催した。なお第二十八号は武田公平の追悼号となり、故人の力作四十三首が飾られた。鬼才武田の死はコロニア歌壇に多大のショックを与え、特に天津、安良田の地元歌人の友情の美しさに、知人ひとしく涙ぐましい感銘を受け

た。最近その歌集「微塵」が世に問われて評価を高めている。

越えて一九五二年の十一月二十三日、岩波菊治がその五十五年の生涯を安らかに閉じた。この突然の他界は歌壇のみならず、ひろくコロニア各文化面に哀惜の念をもたらした。菊治について今さら多辯は要しない。紙上に現われた幾多の追悼文や回顧録が、かけがえのない人間であったことをよく物語り、ブラジル短歌の父としての至業は、イビラプエラ日本館の敷地内に歌碑となって残った。また移民史の上に大きく足跡を印した功績は移民五十年祭には栄誉ある先駆者の一人として傅記されるに至った。その追悼号は翌年の第三十三号に特集されたが、大黒柱を失った椰子樹は新たに酒井を選者に起用、中山が新設の題詠欄を担当することとなり、編集方法も旧来よりいもいくらか変え、同人の作品発表は一人五首に限定された。またパウリスタ新聞歌壇では岩波の後任に行方を迎えた。岩波菊治の逝去と共に、いわゆる椰子樹の全盛時代の第二期を終り、それより建て直しの第三期に入るわけであるが、その転換の前後に、小島正徳がコロニア最初の個人歌集「熱風吹く曠野」を日本で出版し、各地方短歌會ではますカンポスの「静巻」と、スザノの「若原」の合同歌集が酒井の努力で刊行された。アサイは機関誌「南回帰線」を創刊、また日伯歌壇百回記念号「木綿の花」が、選者武本と大原によって編纂された。従来の椰子樹運営と発行は、その直接関係者にゆだねがちであり、地方在住同人は多く傍観的立

場をとっていたが、一九五三年の十月、第一回同人會議を開いてより、全同人の積極的な発言を求めるようになった。また恒例の全伯短歌大會のプランを提案、規約の改正、その他の事項を協議し、出席者（欠席者の委任も含む）の投票による新同人の推薦をおこなった。これで第一回は高林明雄、第二回は坂光男、米川久、玉木一櫻、第三回は米澤幹夫、小竹清子、阿部パウロ、森重扶美。第四回は誇当者なし。第五向は小笠原富枝、唐澤恵津子、紅月伯舟、新納潤魚、簀藤勝子、平松霞、梅崎嘉明、片岡けい子（以上五〇号まで）、第六回は谷佐稚子、西田孝徳、弘中千賀子、大島進、戸崎清作、吹本菊子、八巻梅夫。第七回は志村良一、大場時夫、越村定雄に決定した。

なお第三回（一九五五年）の同人会議では、椰子樹の発展に協調し、短歌の向上に尽力している者のみを同人の資格と認め、後退あるいは絶縁している者をひとまず除外して淘汰したが、四名の本人脱退を受諾して残る者四十三名となった。

その後さらに十七名を加えるわけであるが、前記の同人表で見る通り、現同人で実作者と指摘できるのは軽うじて三分の一にすぎない。そのころの第三十八号より、武本が再度の編集を担当するにおよび、旧来の配列方法を排し、全同人の詠草を作品集1にまとめた。同時に一線級作者の一回二十首発表を実行して、その前号の瀬崎を皮切りに、以後は酒井、

武本、吉本、行方、中山、川原の順に掲載されたが、第四十五号よりは続く者がなく打ちきりとなった。

一時期あれほど隆盛をきわめた短歌熱も、この頃からしだいに低調となり、それを裏書きするように、汎奥ソロ、パラナの地方短歌大會が中絶し、各地短歌會も年数は影を薄めてしまった。こうした低下が必然的に椰子樹に影響して、新顔の進出に比較して中堅層の活動がにぶって来た。汎ノロエステ短歌連盟の全伯短歌コンクールも、遂に第六回から日伯毎日新聞社主催に譲渡されて、刺激を高めるために各線別の団体賞を企画、初年度はセントラル、次年度はサンパウロが獲得した。各新聞歌壇は往時の華やかさはなく、新たにサンパウロ新聞が酒井を迎え、暫時にして中山に代ったが、現在は両者の帰国のために廃壇、瀬崎を擁した南米時事は新聞そのもの終刊に会い、武本の退社で日伯毎日の退歩、一つパウリスタ歌壇のみが微弱ながら、行方の手で維持している現状である。

一万、酒井が自著歌集「寒温」を刊行して、沈滞の中に一点の灯をともした。そして第一回コロニア文学賞が設置されるや、古野菊生と共に受賞して一段の箔をつけた。ついで一九五五年末、ブラジル新歌人集団と銘うつ月刊パンフレットの「蜂鳥」が生まれた。これには井本、南條、新納、志村、弘中、越村、風間、天倉のグループが同人となり、寄る者は力量の優劣にかかわらず同列にあつかった。その意図は椰子

樹の一貫した既成的傾向に対する反撥と言おうか。多くは椰子樹との関係を保っているが、今なお欠かさす続刊している。

統計約報告に大体の経過を補述して来たが、予定の紙数をとっくに超過してしまい、残念ながらこの辺で打ち切ることにする。最近刊の椰子樹はいまだ記憶に新しく、別に特記すべき事項もないと思う。概史にしてもいたく杜撰なものに終わったが、百号あたりはもっと簡明に通覧の容易をはかるつもりである。

戦後の新聞紙上に発表された短歌に関する主なる論評

パウリスタ新聞

○一九五一年

○「見事なるマンネリズム」をめぐる私考（田中正實氏の鑑賞への批判）

安良田　濟

○第二回短歌競詠選後感

瀬崎　濤聲

○一九五二年

○短歌と生活の関連
吉本　青夢
○ノロエステの歌人群像（出身者と現歌人の素描）
脇坂　一
○ノロエステ短歌コンクール選歌寸評
岩波　菊治
○中央歌人万華鏡
吉本　青夢
○短歌大會選歌寸評
岩波　菊治
○永遠の光の詩人　（島木赤彦を追慕して）
吉本　青夢

○一九五三年
○短歌の振假名私見　（私はルビを嫌厭する）
吉本　青夢
○「木綿の花」を読んで
行方正治郎
○短歌への課題
酒井　繁一

○一九五四年
○やし樹つれづれ（第三十五号の感想）

井本　惇

○「黄色」と「くれない」（井本君の感想文に触れて）

武本　由夫

○自然観照歌と生活歌（新納氏に答えて）

行方正治郎

○続「やし樹つれづれ」（「いろい」誤用説によせて　）

井本　　惇

○続「黄色」と「くれない」　（井本君の文に應じて）

武本　由夫

○新人に望むもの（短歌コンクール所感）

行方正治郎

○一九五五年

○私の好きなコロニア短歌

吉本　青夢

○短歌とその社会性

井本　　惇

○失われた熱情不振への提言

行方正治郎

日伯毎日、南米時事、サンパウロの各新聞の分は、椰子樹第五十六号誌上に続掲する。

椰子樹五十号記念讃歌

赤　城　利根夫

鶴の羽毛は野分に逆立ちてその幾片か抜けて飛びゆく

芦　屋　漁　人

パラナ河出水のたまる芦の間に女づれ子づれの鷺出て遊ぶ

古　川　信　子

薄暗き霧のさ中を飛行する機体は悠々と微動だになし

古　川　白　穂

朝な朝な浴みして登校をする孫はほのかにシャボンのかをりを匂はす

古　荘　辰　穂

朝毎に連れ立ち歩む療友は今朝も留守居の妻子を語る

古　澤　千代子

幾日となく気温下りし日ぐれにて音なき雨は軒をぬらせり

儀　武　息　良

北麻州の行方遙かに横たはるセーラ・アズール雨に煙らふ

後石原　百合子

呼びとめて情かけたき心しぬ日本人の紙くずひろひに

原　田　耕　作

一年を離れて住みし吾子のたけのび著し我と並びて

春　名　景　水

朝母に母がかがまり梳きませる髪さやさやとすでに眞白き

生　駒　　生

妻も子もそれぞれの想心に黙しつつ停電の卓に蝋燭を囲む

井之盛　一翠

手に取りしコップにビールつぎくるる妻も眼の縁を赤らめて来ぬ

井之盛　井　子

炎天の樹蔭に止めあるトラックの下に潜りて昼寝してをり

石　塚　東　秋

好まざるも蒼かな臭きかをりする浅井の水を日毎汲みをり

石塚やす

朝顔の大輪見つつ咲き次ぐをたのしむ如く蕾かぞふる

伊藤香椎

山なみをあほへる雲のをの下に果なく牧の緑はつづく

岩本錦、川

正月の旅の想ひ出語りつつ澄む陽の下に毛糸編み居り

岩波とめ

五十号出づれば我は亡き夫のみ霊の前に捧げおくらむ

岩佐一歩

かにかくに豆植え終へてしとど降る雨をたのしみ聞きつつ眠る

金井レイ子

散る花に人のさだめを見ひつつ雨後の朝の庭のべ歩む

神田笹浪

培はむ意欲に燃ゆれ脈拍の不調を思ひ菜園に立つ

加藤　操

食欲のなき日がつづく療院に我亡き後の妻子を思ふ

清谷　勝馬

かびの来し靴を日に当つ外出前百姓我は常はだしにて

木津　耕二

出荷査証受けむと来たる税務署の夕づく庭に小鳥群鳴く

小原　睦子

久しぶりに思はぬ友と会ひにしも喜びとはならず街歩み行く

近　昇

夕立の流れ片より道のべの忘れられたるタマンコが浮く

國松　英輔

古稀の身の土に親しみ健やかに二人の嫁にいたはるる幸

毎熊　百合

すすぎ物干す裏庭に月明く蜜柑の花はほのかに匂ふ

南崎　雅草

シネマへともなふ娘らが左右より何気なく吾が手を組みて行く

望月　けい子

厨にて唄へる姉の讃美歌に義兄が合はすをたたずみて聞く

村上　柾二

車中にて頬ふれ合はせ囁ける若き二人を微笑みて見る

村手　子葉

若き日の我になかりし大胆さを少女は持ちて恋を語れる

中井　すみれ

アジア風邪未だも熄まず聖市なる孫の身の上案じつづけつ

中村　たえ

花嫁が別れを告げて自動事に乗れば蛍の光をうたふ少女ら

大橋　松壽

斧とぎに溪へ下れば落葉して清水涸れをり旱りつづきに

奥村　ふき子

おもひきり短く刈りしわが髪を若くなりしと夫のからかふ

奥野アントニオ

療院の窓を開きて荒るる風ユーカリ林に潮騒のごと

大友東風

亡き妻のたのむと云ひし遺兒は今花嫁となりて厨子にぬかづく

斎藤太郎

誠実だけでは生きて行けぬと友の云ふ並びて靴を磨かせ居つつ

坂本清人

贈られてかえで一鉢は店ぬちの朝の光のさす位置に据う

佐藤一英

白樺の芽吹く舗道を金髪の少女が日本の日傘さしゆく

五月蠅人

草の穂を映して澄める大江にボートおろせし波紋のび行く

瀬古義信

伸び過ぎし芝の下葉は黄ばみて刈るその茎はすでに固しも

仙田ます子

久にして朝陽さし来ぬくつろきてフロール・デ・マイオを今日も接木す

椎名　千代子

厨にて友は胡瓜をきざみつつニーマイヤーの建築美を語る

清水　深秋

月明りもるる独つ家にランプ寄せ詩を書きをれば鶏鳴聞ゆ

楠　秀子

日本人と関り持たす生き居らむ君が妻子を思へば切なし

（武田公千氏を偲びて）

高田　蔦五郎

飛びつきてただに甘ゆる頃なれど訪ね来し子は梨の皮むきくるる

高山　一枝

手に残る白墨の粉の感蝕をたしかめにつつ夜道をかへる

瀧本　成雄

みな眼とぢゐる客をのせしバス深夜の道をひた走り行く

玉木　梅

遠く文化を離れて土地を拓きたる先驅の人の業は尊し

寺　田　新茄子

コーヒーの花咲く下に草取りつつ思ふ椰子樹誌の五十号経にしを

東　丘　てるを

灯のとどく範囲に降れる雨脚が白く光りて土しめりゆく

上　原　知　水

病よき今日街に来て聖母像を迎えて歩む列につらなる

黎明以前の記

池田　重二

コロニア唯一の歌誌「椰子樹」が創刊されたのが、一九三七年十月、既に二十年の星霜を途つて、五十号の巻数を重ねた。創刊当時の編集人間では、三号雑誌に終えたくなく、せめて二、三年は続刊したいものだと念願していたが、その経営難の「椰子樹」がどうにか曲りなりにも、二十年間も続刊してきたのだから驚かざるを得ない。

コロニアの短歌振興に最も貢献したものはなんと言っても

新聞短歌壇であろう。戦前のコロニア新聞が、文芸欄に力をいれなかったら、コロニア歌壇も或いはさびれ、今日程発展したかどうか疑問である。日伯新聞の選者岩波菊治、プラジル時報に於ける編集の徳尾渓舟、投稿家の阿部青社、聖州新報では社長香山六郎、短歌欄担当の須貝さだめ、木村茅里等の功績はコロニア歌壇黎明期に於ける大きな存在であろう。

日伯新聞は選者に菊治をむかえたが、質の方に力を入れたので投稿家が少なかった。「ケッペキ」の菊治は嚴選主義でレベルをおろさなかったから、当時コロニア新聞のインテリ層を愛読者にしていた新開の割合に、投稿者が少なく歌壇は振わなかった。

ブラジル時報は一九三六年頃、徳尾渓舟が文芸欄を担当してから大衆主義に傾むいて、大いに新人を優遇したので玉石混淆のきらいはあったが、文芸欄は旺盛な活動力に色どられ、他の新聞を圧して光彩を放った。それに拍車をかけて一九三六ー七年から阿部青杜が寄稿執筆するようになって、歌論に見るべきものが多かった。それまでは今井白鴎（アララギ入選作家）などが時々詠草を紙上に飾る位のものだった。渓舟が文芸欄の担当をやめて田中正實（大田水穂系）が選者を一寸やっていたが、大衆的でなく片寄った編集振りだったので、すぐ反感をかってやめ、次いで武本由夫が選者になった。その頃時報で徳尾渓舟、武本由夫、住吉砂丘の三人が選者になって「全伯短歌」を募集した事があった。聖州新報は

一九三六年須貝さだめが歌壇選者となり、俗にその頃聖報調とも言うべき短歌を、紙上に大いにもり、その秀作を一冊にまとめたものが歌集「移り来て」で一九三八年刊行した。須貝さだめの後任に木村茅里、住吉砂丘等が文芸欄を担当したが、やはりコロニア文芸の推進力に偉大な役割をはたした。

当時サンパウロ市では歌會と言うものが殆ど催されなかった。一九三七年二月「地平線」が文芸誌と名のって発刊されてから、同人等が、歌會を催そうと言って、毎月集る事になったが、古野菊生、徳尾渓舟、富吉好人、住吉砂丘、武本由夫、池田重二位で、いつも出席者はきまっていた。時々女流の久保妙子が参加する位のものであった。全部独身で、薄給生活に泣いていたから、僅か一、二ミル会費が大変だった。ガルボン・プエノ通の古野の下宿や、ピニェイロスの武本の下宿と会場を持ち廻り、或る時はフレゲジーヤの詩人古田土の養鶏場を会場人に(ママ)襲撃、歌会はつけたりで、めったに鶏肉など「タラフク」食った事がない連中なので鶏のスキ焼に舌鼓を打った事などがあった。オエブス代も充分ないので、往路は十余キロをテクツタ健脚には驚いたが、敵は本能寺で鶏料理とあっては、歌会はどうでもいい、健脚ならざるを得なかった。

あの頃は今日のように紳士ぶらず、皆兄弟のように睦まじかった。独身生活で前途の希望に輝やいていたから、物質には恵まれていなかったが、精神生活は案外豊かであった。精

神的に旺盛な向上心があったから、難産だった「椰子樹」の発刊までにこぎつけたのであろう思う古野は「子供の園」の編集をしていた現夫人と恋愛。そして結婚にゴールイン、羨ましい家庭生活を営んでいた。そして詩、小説、評論に益々冴えてきた。武本も少年少女時代の幼馴染（それも日本で……早熟だったのかしらん？）の現夫人との結婚話が持ち上り、安月給の「暁星学園」の教師生活に明るい光をみいだし、情熱的になり、ピンガを飲む度が止り、それと同時に短歌にも異様の精彩が加わった。富吉石竹花も同船同航海の美少女を、何年振りかで聖市の街路で邂逅したのがきっかけとなり、富吉流の強引で夫人の兄弟の反対を押し切って結婚し、ブリガデイロ通の総領事館前の、谷底みたようなポロンに三部屋を借り同棲した。三部屋で百ミル位の家賃だったと思う。放浪生活の筆者もその一部屋にころげこんた。美代子新夫人の御馳走で、よく飲んだが武本、徳尾、吉本青夢、住吉等がよくこのポロンに集まって夜通しピンガをあおり文芸論に花をさかせたものだ。「椰子樹」創刊前であった。

徳尾はア・ペンチアードに通学、勤厳実直な学生だったが、このポロン時代に酒の味を覚えて、遂に今日歌壇随一を誇る酒仙になった。某工学士に美貌理智的な二人の令嬢がいた。美貌理智を一人で兼ねておればよかったが、姉は埋智で美貌の方は普通、妹は美貌だが理智の方はまあまあ、母上は姉を徳尾にくれたかったし、又姉も徳尾が好きだった。よく

音楽会などの催しなどには徳尾を交えて一緒だったが、徳尾は妹の方が？、これでは何時になっても結婚はまとまらない。姉が先に嫁にゆくのが邦人の習慣だ、グズグズしている内にこの結婚は解消、純情無垢だった徳尾は、富吉や古野の如き強引な恋愛結婚は出来ない。あの頃の彼の日記は「はるかな思いをよせている彼女は叉嫁づいたか」と言うような、悲恋切情な文章にいろどられていた。最もそれだったから、その反動が作歌熱に駆られ今日の彼の作歌地位を築きあげた訳でもあろう。

サンパウロ歌会に出席した女流久保妙子は、医学士久保裕の姉である。愛人が裏切った結婚したので（ママ）、その失恋の反動で歌作に驚異的心境を見せ、立派な作品を発表していた。惜しいかな数年後結婚生活に入るや同時に歌と縁をプツリ切った。

コロニア歌壇に彗星的に光を放ち叉彗星的に消えていった歌人の一人で、今日まで歌作していたら、葛西妙子、開沼貴代、西田季子等と共にブラジル閨秀歌人として光彩を放ったと言えるだろうと思う。惜しい作家であった。

そう言えばコロニア歌壇には結婚生活に移ったら、歌をやめた歌人が多い。大正時代に岩波菊治と共に、アララギ誌で一段組に作品を発表していた今井白鴎も長い独身時代には旺盛な力量を示し、教え子に中須夏山の如き異色なコロニア歌人を輩出せしめたりしたが、リンス学園教師時代に結婚生活

に移るや、プッツリ歌から遠ざかった。小田切劒もせつ子夫人の死後、大いに秀作発表、「国民文学」などでは相当たかく評価されていたが、福田夕月と結婚生活に入るや、殆んどコロニア歌壇から姿を消してしまった。小田切はコロニアでは実作家として一流歌人だが、惜しいものである。そう言えば中堅の大原友重なども、結婚を機会に歌作生活から遠ざかったようだ。

余談に流れたが、当時のサンパウロ歌会では久保妙子は光っていた。他に女流に木村芽里がいたが、当時の聖市歌会には家庭の事情で出席しなかった。往年「椰子樹」創立委員会や椎木文也歓迎歌会など催してから、ときどき出席した。何時も淋しい面持をしていたが、当時の歌にもその心境がよく現われていたようだ。須見さだめ（本名富美子）は「移り来て」の歌集を編集刊行し、後に「地平線同人」を辞退してからコロニア文芸と縁をたった。故樋田美沙子が聖市歌人の仲間で光っていたが、余り表面にたたない人であった。住吉や筆者も文学に熱のあった当時だったので、一九三七年頃阿部青杜がマリリア市から出聖するや、急に歌会も毎月盛んになり、そこへ坂根嵯峨の来聖、椎木文也のリオ赴任となり、こうした人々の援助で「椰子樹」の創刊が実現された創刊当時同人費月三ミルが重荷じゃないかと思われた時代であった。嵯峨と文也に雑誌刊行の度に百ミルづつ補助をあおいで漸く印刷費が出た訳である。坂根嵯峨と椎木文也が出版

費を援助しなかったら「椰子樹」は三号雑誌に終わっていただろう事は確かに断言できる。編集や営業に就いては武本、徳尾の二人が、今日まで献身してくれたが、二十年昔を考えると、やはり当時から短歌に就いては特別な情熱を傾けていた。コロニア短歌から椰子樹を切り離すととが出来ないように「椰子樹」と武本、徳尾の二人は切り離すことは出来ないだろう。今後椰子樹誌の生命のある間は。……

「コロニア専門歌誌がほしいなー」と歎きながら、薄給生活の中からさいた僅少な金でピンガをあおり、そのピンガの勢で気焔をあげていた二十余年前のサンパウロ歌会が懐かしい。お互い五十前後の年輩となり、生活に追われ子供の教育に悔む頃となると、特に独身時代のコロニア歌人が、大きな夢を見て歌作にいそしんだ「椰子樹」創刊前の追憶は身にしみる。これが今後三十年、四十年と経れば、もっと懐旧の念にかられるだろう。

五十号の記念に一寸創刊前サンパウロ歌会の憶出を書いてみた。

思い出は遠き日に連らなりて

坪内　廣代

坂根総領事も岩波さんも逝ってしまった。石竹花、秋野愁この人たちは今どこにいるだろう。あのころ若かったのに分別くさい顔していた二人の面影が、おぼろに重なりあって浮んで来るのはどうしたことかしら。歌会の度ごと欠さす出席して、大きな薩摩声とどろかせていた池田重二氏は今もあんまり変わっていない。

あの大きな目玉をぎょろりむきだし大いに先輩の地位で作歌し、歌論に花を咲かせていた阿部青杜氏、戦争前思い意の如くならず日本へ戻ったが、終戦後は、畑違いの織物会社の社長に収まって、私が訪日した時羽ぶりを利かせていた。きれいな女店員達が社長さん、社長さんって云うのに、あの美髭をひねりながら「ウン」、とか答え乍ら、片手で受話器をとって「ハイハイ承知しました」なんて鮮やかな手さばきをみせていた。国分寺の何とか中将の屋敷跡を買取ったという立派な邸宅に一晩招かれた時、大きな黒檀の机の上ば立渡な支那硯がのせてあって、「忙しい暇の中から書を習っていますよ」と話された。氏の筆跡のなかなか立派で格のあるのもむべなるかなである。

私の妹のようにして来た木村茅里さんは、今は再婚したので三浦の姓を名のっているが、そのころ聖州新報の婦人記者

をしていて貧しい未亡人ではあったが、やさしくて詩情豊かで丸い声の持主で匂いほのかにと云う感じのひとだった。聖州歌壇や家庭欄を受け持っていて、女の人をだいじにしてくれた社長の香山さんの袖の下であのころは、「さだめ」さんって名のっていた須貝さんと私と三人で大いに理想を心に盛りあげて熱心に短歌の話をしたり、食生活について聖市の寄宿舎の台どころのぞきをしたり、それを記事にしたりしたものだった。

私たちは叉歌人総領事坂根さんの夫人とも、大変親しくさせて貰っていた。よくあの豪華にかざられた官邸の応接間に集ってごちそう頂き乍ら、好き勝手な話をし合ったり、唱歌をうたったり楽しんだものだった。聖市一流夫人の集いの水曜会などとは似もつかぬ肩のこらぬ庶民級の私たちと、林芙美子の詩を読み上げてみたり、泣き虫小僧なんか小説の本のよみまわしをしたりすることが、案外夫人にとってもいい息抜きだったのかも知れなかった。坂根さんがおそく酔ってかえられて、梯子段から夫人に突き落とされたと言う逸話もこのころのことだ。

徳尾さんのつむりもまだあのころはそう薄くはなかった。女流歌人の誰にでもなかなか親切のようだった彼氏は、まだ独身だったからね。武本さんもとても若かった。あの日本荘蓮池のほとりで撮った写真をとり出して見たら今昔の感に耐えなかった。中に紅顔の美青年清谷さんがいる。聖州新報へ

はいりたての頃はまだ少年の気がぬけていなんで、茅里さんが姉さんぶって益次さーんなんて呼んでいた。今はあご髭のそりあとの濃く青いお父ちゃんになっているのに。

そう云えば戦時中、モジ・ダス・クルーゼスの奨学舎に私が居た頃の則近さんもいいモッソだった。いきのいい青年歌人で、誰にでも好感を持たれていたー。

最近御両親共逝ってしまわれ、数人の子供さんのパパイになってしまった。忙しい鶏飼いの彼氏はすっかり若さを失ってしまって、お逢いする度健康が心配になる。則近さんがモジのあの優秀な女流歌人幾たりかを育てあげた短歌界への功績はとても大きい。それに則近さんは準二世に珍らしく博学の詩人だ、どうか自重して頂きたい。

さて私がいつも思うこと、岩波さんがもう少し長く生きていてくれたらと云う願いです。あの朴訥さと地味で腹で行く(ママ)真実な持味の岩波さんが、この地上から消えたことによって、ブラジルコロニア歌壇いや文化界の損失はなんぼう大きいか知れない。残していった創業の足蹟の大きいだけに惜しまれてならない。もっと生きていてあなたの実に良いお弟子さん達の円熟期を見て欲しかった。あの桃蔭山房の新築の住居へ留未亡人を尋ねる度更に、この思いを深くする。

あっ、そうそうあの時代の思い出の巻ものの中に、当時バストスからのりだして来立ての葛西さんを抜かすことは出来ない。若き日の妙子女史に私はさまざまの印象をもってい

る。何しろ坂根さんに耳たぶを舐められ兼ねなかったあの頃の葛西さんは何とも色ぽくて、信州の山育ちの自分には歯が立たなかった。単に美貌の持主というだけでなしに、若き日の彼女から発散する「イツチ」って云う風のものが自分には助からなかった。なんて云うと「あらまあ嫌だ」葛西さんはおかしそうに口に手を当てて笑うだろうけど。しかしもう十七八年前もの時効にかかったこれは話、今の初老のさびついた葛西さんは、私にとって一番短歌界で身近かにいてくれる親愛の友だ。説明なしで話し合えるこのひとの存在は、辛うじて私を椰子樹へのお仲間入りをたとえ隅っこでもおいて貰える力だ。

私はだいぶ長く思い出の糸をひっぱって来てしまいました。もう一つだけちょっぴりおきき下さい。それは或る雨の日の日本荘行き短歌会、糠雨のそぼ降る中を一行十二、三人は濡れてあのサント・アンドレーの駅から徒歩で山坂越えねばならぬ。野道は信洲の軽井沢あたりの空気の澄んだ高原路を行く思いだった。目路の果、山とも野とも見定めがたく霧らう中を（ママ）、道草喰いあるいて行った楽しさはさながら金平糖の味だったと思う。もちろん親方の菊治さんも阿部さんも徳尾さんも武本さんも、石竹花、秋野さんたちもいた。女性は私と茅里さんだけで、帽子なんかかぶって気取って濡れていたのだからおかしい。足元の小さい花や草がみんな露を含んでとても新鮮だった。案山子の書と句のある碑の横に

立って、池をまえに撮った写真はもう大分古びているが大切にとってある。

みんな若かった

ささき　ふみ

いまから丁度、二十年の昔になる。

一九三七年正月、「地平線」という文芸誌が古野さんの主筆で創刊されると共に、「サンパウロ短歌会」ができて、その第一回の歌会に私も出席した。

どんより濁ったうす曇りの日だった。場所は暁星学園であったに違いない。会場は隣家の軒や廂が鼻の先につかえるような教室の一隅で、おせんべいも出ていた。出席された方々の記憶は全然ないが渓舟さんのことだけよく覚えている。私はその時、ひどい鼻風邪を引いていて、開会中、鼻汁ばかりかんで仕方なかった。その他の事は思い出せない。

まだ明かるい中に散会した。私は帰りの途が解らないので、シダージに帰る渓舟さんが案内して一緒に電車に乗った。アラサの墓場にさしかゝる頃、うす暗くなって、電車の後へ後へと小さくなって行く花売り場を、異國をさまよう旅人のような懐かしさで、いつまでもいつまでも見送った。

わが電車まがればアラサの花市場遠ざかり行くなつかしき

かな。やがて賑やかな町に電車を下りた時は宵のざわめきが溢れていた。それはプラッサ・ラーモス・アゼベードだったに違いない。さて其処に電車から下されても田舎者の私には、西も東もわからない。「私は、プラッサ・ジョン・メンデスという所でほんとうは電車を下りるんですが、どうしたらよいでしょう」と、私は、「これで失敬します」と身をひるがえす渓舟さんに心細げに尋ねると、「エーと、それでは」とキョロキョロしていたが、やがて其処へ来た一台の電車に私を乗せてくれた。「これに乗って、これの終点で下りたら、プラッサ・ジョンメンデスですよ」と云って、渓舟さんは人混みの中に消えた。忽ちの中に宵暗は迫って、電車は脱分長い間走った。その中小さな雨のつぶてが風に交つて来た。

私は劇しい悪寒と、頭痛におそわれて来た。電車はすごいゆれ方で長い長いアヴェニーダを走っていた。終点に着いた時、私は完全に病人になっていた。私はあの頃のルア・ボニータ、今のトマス・デ・リーマに住んでいた。どんな風にして家に辿りついたのだろう。転げるように家に着くと、どっと床についた。というと何だか講談めいて大げさだが、その通りだった。十日程寝込んだ後、入院した。そして退院すると、イピランガに移転した。其処で岡田英定老人の休操会に入ったり、午前は日光浴などの静養生活だった。その四、五か月経ったある日、地平線の二号が届いた。見ると、第三回サンパウロ短歌会の記事があるので、懐しげに読み始

めた所、私は頭を不意に叩かれた。記事は石竹花と云う人が書いている。第一回歌会において雄々しき抱負を語ってい某女史が如何なる心境の変化か、第二回にはついにその雄姿を規わさなかった。最初に会した時の動機が浅薄な物好きからであったか。我々は斯様な亡霊歌人の雑言に耳を傾むけるほど気紛れに作歌をしているのではない。云々

私は唖然とした。あの頃、我も赤毛布渓舟さんも田舎者。プラッサ・ジョン・メンデスは、プラッサ・ラーモスと目と鼻の間にあるのに、御ていねいにアヴェニーダ行きの電車で遠回りして、風邪の心地を雨まじりの風に吹かれて私は病気になったわけだ。私が、二回、三回の歌会の欠席は半ば渓舟さんの責任でもあることを、渓舟さんは二十年この方、夢にも御存じないことと思う。私は、石竹花という人は誰であるか今だに知らない。

私はあの時のこと、渓舟さんのこと、地平線の記事の勢いを思うと懐しい。みんな、みんな若かった！あの若さが椰子樹出現となったのだと思う。

忘れ得ぬ人々

秋野　愁

「おやそんな男もいたっけなぁ」などと感心しないで頂きたい。これでもいまだに存在するのである。どっこい生きて

いたである。椰子樹五十号記念に何か書けとある。発信人は中江克己兄、俗称「モリさん」であった。アリアンサ移住地居住のその昔から、いまだに主義一貫した吾吾仲間のズボラとは別世界に生きる「モリさん」とは葉山幸子なるペンネームで歌稿をものし、時のブラジル時報に選者たりし徳尾渓舟をして、同性愛？に致らしめたる事実がある人物である。とまあこんな調子で椰子樹創生記の筆を起こすことと致そう。

椰子樹最大の恩人でもあり金主でもあったのは、支那大陸は青島総領事の坂根嵯峨が、遙々サンパウロ総領事として転任したときに、その歴史発祥の因をなしたとみるべきである。総領事としての坂根準三は何の変哲もない一介の官史であったが歌人嵯峨はコロニア歌壇のホープだった。水鳥十三子、花瀬群濤のペンネームをもって大いに活躍した。その当時の在聖歌人のうち、いまは亡き岩波菊治先輩を始めまして、当時の酒豪たりまた筆豪たりし武本由夫、前記徳尾渓舟、デカダンスの石竹花とと富吉好人、等、頭脳と反比例した経済状態を持すること久しき面々には、短歌雑誌の発行費などすべてを地方読者の経済援助に求めていた時代である。吾々の苦悩をみたポープは大まい一コントスの大金をポンと吾々に投出して、よき同人短歌雑誌として成長する様激励され、雑誌名「椰子樹」まで賜ったのである。吾々は感激したこと申すまでもない。

さて第一回サンパウロ歌会なるもの出席者名簿をみると、

武本由夫、徳尾渓舟、それに女流の須貝さだめ女史、彼文の話術のたくみさは抜群だった。そして常に衆目の中心に自分を置くことを忘れなかった。プライドと共に教養もあった紅一点。富吉好人もいた筈だが、調べてみると歌稿がない、とすれば宿酔で凡作をものしトルことができない歌だったかもしれない。それにかく申す拙者、住吉光雄こと秋野愁とまあ、こんなメンバーだった。

そうそう第三回歌会あたりから、常に若々しく酒脱瓢々とした佛文学者で詩人の古野菊生氏に登場して頂かねばならない。第五回目あたりから久保はな子女史の才智あ容貌がみられる。第六回目に今では出版王の池田重二がもっそりした顔を出す。七回目あたりに樋田陽荘氏夫人の故美沙子女史が

病みあがり呆けて立てる裏庭にわが眼にゆれて梨の葉の散る

の歌稿で最高点をものすると、出聖した大御所いまは故人の岩波菊治氏が第九回の歌会で

山原のせまき石畑耕して静かに生活たつるはや

と出場続いて名物男、萬葉論争で渡部南仙子と善戦の阿部青杜が登場。第十回目パラナから渋川不二夫、第十一回目木村芽里史が

汗なして獲り入るる業なさんとし夫と経て来しこの道の難さ

と百姓生活のつらさをなげき、続いて女流坪内内廣代、田

中愛子、また仲間美登里、田中正實、小林清子と椰子樹ルネサンス時代となる。

第十五回吾々のホープは遂に

かへりみるわが足あとの影うすく弱きちからを責むるに似たり

との一首をコロニアに残してコロンビアに転任して行った。

椰子樹も二十年経れば、いくばくかの果実をつけるであろう。立派に稔った果実風雨のため青果、すでに痛めつけられて落果したもの、害虫のために損じたもの等々、限られた紙数でそれらの成熟までのひとつひとつ話し得なかったことが残念ではある。

全伯短歌コンクール

高点歌詠草

第一回より第五回までは汎ノロエステ短歌連盟主催

節六回以後は日伯毎日新聞社主催

○　第一回　一九五一年

1　　西田　季子

追従の一日も過ぎぬと仰ぎ見る天使立像は没り陽に映えつ

2　　武田　公平

病む我に食はすと友が釣りて来し魚鱗は光る夕光の中

２　天津　夢城

華やかにパイナの揺るる日の思惟よ病む友の邊をひそかにめぐる

３　瀬崎　濤聲

ゆき速き地平の雲を眺めつつ朝風塞き飛行場に佇つ1

○　第二回　一九五二年

１　東野　暁風

病ややよろしき妻が木洩れ陽のゆらぐ井戸邊に髪洗払ひ居り

２　越村　定雄

工房のわれに明るき聲のこし貝細工売りに吾娘は出で行く

３　別府　二郎

金庫あげて紙幣数ふる友の前借用証書に署名し終る

○　第三回　一九五三年

１　紅月　伯舟

手作りの食器掛に塗りし藍色が土間の一隅を明るく占める

２　　阪東　啓二

スターリンの死にかかはわもなき我ら号外を置きまた鶏糞を掻く

３　　米澤　幹夫

おとろへてここだも散れるサルビアにけうとく牛後の雨はふりつつ

３　　阿部パウロ

濱木棉の黄に群咲ける崖の上鋭く一羽の鴨飛びゆけり

○　第四回　一九五四年

位藤　一英

石灰と混ぜて堆肥をつみたれば今よひ吾が手が夜着にざらつく

１　　梅崎　嘉明

くれなづむ舗装路に工夫うづくまりてガス溶接の火花を散らす

２　　三浦久和子

干瓢がすだれの如く干されゐる雨あととみに秋づきし日に

３　　坂　光男

汽車すぎてなほしばらくは鳴りてゐるか押す貨車の隣りのレール

○　第五回　一九五五年

１　　坂　光男

夜の庭に火を炊き作る硫黄合剤こぼれて燐の光に燃えつ

２　　矢坂　行男

税務官買収も生きる手段と言ふとの現実に馴れゆく吾か

３　　山本　和枝

逢へどただ事足る想ひ遠来の老母は離室に一人まどろむ

○　第六回　一九五六年

１

吉本　青夢

客足のとだえて雨となる夕べ心ともしく日覆ひまきあぐ

２　　山村　俊子

アパカテの稚実揺れゐる木蔭にて少し癖ある吾子の髪すく

３　　東野　暁風

集金も空しきままにバス降りて夜霧の街にホテルをさがす

３　　山本　和枝

転業企画の事は老父に言ひ難し移らふ木蔭見つめつつ佇つ

３　　坂　光男

夜半の月冴ゆる埠頭に影おとしバナナ吊れる起重機揚る

○　第七回　一九五七年

１　　並水野の人

カテドラールの色絵硝子に陽はうつり光の中に人等合唱す

２　　中村　たえ

廃鶏を出したる鶏舎に入日射し餌箱のみが並ぶ静けさ

３　　川原比露思

点りたる舟一つ運河の岸に泊てめぐりの水が灯に明るめり

故舊忘れまじ

吉本　青夢

椰子樹は第五十号を迎えた。よくここまで来たものだと遠い創刊当時を追想しして、ちょっと涙の出る思いがする。あれからもう二十年になる。ぼくも五十の歳に達してしまったが、あのころはまだ若さがあった。人生は美しく、歌友とのつきあいは楽しかった。

当時、改築中だったお茶の水橋脇に、これも工事中のマタラゾ・ビルの技術課へ、ぼくはモジアナの同農場から派遣されてサンパウロに着いたばかりの日であった。くわしく言えば、一九三八年の九月十三日の午後、コンデ街のＳホテルに投宿すると、その足でブラジル時報社に徳尾渓舟をたずねた。彼は人社するまでサン・ミゲールにいたが、前から時報文芸欄の投稿仲間として文通していた。ぼくが短歌に身を入れるようになったきっかけは、もちろん持って生まれた文学好きからでもあるが、彼の作品になかば魅入られたゆえんである。

ひそかなる想ひは寄せつ幾たりを嫁がせしかな哀れ我が春

とりわけこうしたロマン調の歌に、ぼくはどれだけ心をひかれたことだろう。

徳尾渓舟の情愛の深さは今も変わりはないが、胸のつまるような手紙を幾たびもくれたし、わざわざアララギまで送っ

て寄こした。この彼がブラジル時報社の記者になると、急に文芸欄は活気にあふれて、ぼくの作品までが枠づきで出て有頂天にさせた。とにかく当時の徳尾渓舟と言えば、まるで、コロニア文壇を一人で背負っているかの感があり、その覇気は鈴木南樹、今井白鴎鴎、小田切劒などと、胸のすくような論戦を交えていた。

こうして渓舟は初めてぼくが出合いをした歌友の一人となった。まずその対面で度肝をぬかれたのは、彼がぼくを社長室へみちびくと、社長専用のソファにでんと座りこんだことである。からが小さいから埋まっているけれど、ちょうど黒石清作の不在を利用して、ぼくに渓舟たる威厳を見せたのであろう。しかもコロニア短歌の将来性について、弁舌あざやかにまくし立てたのには、ぼくはただ神妙に拝聴するばかりだった。かくして彼は一席ぶち経ったが、別れぎわに、鴨川君、いいチャンスだったよ、あしたの晩、日本クラブでぼくらの出す短歌の相談と歌会があるんた。ぜひ出席したらいいたろう。と告げてくれた。その翌晩、ぼくはリアシェイロ。街の日本クラブの階段を上って行った。集った者は男女合せて二十五名あまり、徳尾を除いてはみな初対面である。正面には坂根総領事閣下が座っていた。およそこうした要職とはかけはなれたタイプ、まるで小学校の校長のようで温和な印象をうけた。後で知ったことであるが、坂根嵯峨だけではあきたらず、別に花瀬群濤、櫻井薫、水鳥十三子というペン

ネームを持ち、やたらに興に乗って詠みまくっていた。ぼくは長谷川海太郎が放逸馬、谷譲次、林不忘を使い分けしたのを思い出したものである。それ以上におどろいたのは、酒に酔うと人の顔をなめ感激して泣く変態性癖があった。岩波菊治が料亭ではこれをやられたし、送別会の時に、バストスから来た葛西妙子がさんざん悩まされたという。エピソードが伝えられている。その坂根総領事はまじめに「歌の特点」を語っていたが、ぼくは壁にはり出す詠草の書き役にされて聞くことができなかった。

新顔のぼくは完全に固くなっていた。すらりと十人ばかり並んでいる女性の中に割りこまされたからでもある。隣りにはたしか木村茅里がいた。その時の彼女はもう未亡人だったかも知れないが、とてもきれいだったので一番よく印象に残っている。この麗人とは再婚して三浦姓となった後、プ・プルデンテの汎奥ソロ短歌大会で会ったが、かつての美貌の影なき変わりかたにわが眼をうたがった。生活苦は肉体までむしばんだのであろう。モジへ移ってからは歌作どころか交際も絶えてしまった。この茅里とは対照的だったのは坪内廣代、口まめにしゃべくる座持ちの妙は、昔より今は輪をかけて健在である。須貝さだめとはその時きりしか会っていないが、知性のかった頭だちにうかぬところのあったのをおぼろに記憶している。後で聞くと、グループからあまり好感を持たれていなかった。これはたがいの性格の行き違いから、な

にか誤解を招いていたのではなかろうか。もう一人の郡山あや子とは、創刊後にカンタレーラ貯水池でひょっこり会い、ハズをそっちのけで歌を語っていっしょに歩いたのを思い出す。椰子樹には作品を発表しなかったが、戦後にN書店の売子をしていたころは、新聞に甘ったるい詩や随筆を書いていた。この彼女が東本願寺法主夫妻が来伯した時、どういうえにしがあるのか、腰元となって相当いばって歩いたそうである。

この夜をきっかけとして、ぼくと中央同人との交友が始まった。ぼくらの集会所はきまって富吉好人の石竹花居、今は取り壊されてしまったが、ブリガデイロ・ルイス・アントニオ街のとっかかり、舗道から急な階段を下りた陰気なポロンであった。富吉は新婚のほやほや、技工師だがコジーニアの隅ではもぐりの歯医者をやっていた。貧乏ぐらしのくせに気前がよく、絶対に人に金を出させないたちの男だった。それをいい気にして、ぼくらは集まるとどくろを巻いて一本のピンガをあけたものである。そこには池田重二がころげこんでいて。どこで働いていたのか、サーラのカピン・ペットに寝そべって、何か書いていた。今でこそほてい腹をつき出して著述家然としているがあのとろの彼と来たら、人生にぐれたニヒリストのような気色の悪い男だった。

この渠山伯のリーダーは何と言っても武本由夫である。足しげく来りては独自の短歌論に毒舌をふるい、ピンガはかく

飲むぺしと指導をおこたらなかった。その手ほどきによって、ぼくは悪い面のみの感化を受けてしまった、彼は酔いが過ぎると正体のくずれもりっぱである。つかはひどくからんで来て、青夢、おめえのような心がまえで歌ができるか、十年後に作っていたら見直してやるよ、と言うなりメーザごとぶっ倒れる。なだめすかして外に連れ出したはいいが、おい青夢、友情があるならタクシーを呼べ、がなると同時に小間物屋をひろげてしまった。その点、徳尾渓舟は飲む方だけはまだ序の口であった。書は新聞社勤め、夜はア・ペンチアードの商科に通学、勉強一途であったからむりもないが、それが今ではビールを鯨飲しては美声をはり上げ、料亭での顔ききになろうとは誰も予想はしなかった。秋野愁こと住吉光雄は、わずかのつきあいでは親しみきれない。物ごとを理性で割ってしまう男だった。そのくせ気が弱く、ほれた女性に自分の思いがうち明けられず、ミナスに逃避行して消息を絶ってしまった。その意中の相手というのは、後に瀧澤正と結婚して、不幸にも未亡人となった女性である。住吉は最近ひょっこりサンパウロへ移って来たが、テレビゾンを初めて見ておどろいたという彼である。

ぼくは街に灯のつくころになると、やたらに石竹花居恋いしくなる。近いせいもあったが、ホテル住いの退屈さから訪ねてみたくなった。ある夜のこと、ホテル前のペンソンにいた住吉をさそい出かけて行く道で当の富吉に会った。これか

ら盛り場をてくろうと言う。富吉はフロントンの賭けスポーツでちよっと穴をあてると、もう本性を現わして足ば色街に向かう。彼は沖縄県人特有の精力旺盛さを持ち、おまけに細君が産み月近くとあれば当然であろう。そのころのパイサンズー付近は公娼区域をなしていて、ロングスカートの女が軒に立って客を呼んでいた。そのなじみの一つに登楼しようと進めるが、ぼくも住吉も應するだけの勇気がなかった。ぼくらは退却してブロードウェイでエロール・フリンのロビンフッド映画を見ることにした。聞けば富吉のお供をすると、徳尾は女部屋の台所でグワラナを飲みながらすむまで待ち、武本は外の電柱にもたれて出て来るのを待っていたそうである。二人はをれだけの友情の深さを持っていた。

とにかくこういう飾り気のない手合いが集ったのだから、意気投合するのは当然である。寄ればかならす卓上に一本のピンガあり、飲めば酔い、酔えば議論の花が咲く、これが時には深更におよぶのだから、その熱情と気迫のすさまじさは推して知るべし。かくして椰子樹は遂に創刊された。中心の阿部青杜は興奮していなかったと思う。何しろぼくら五人が例のポロンに籠宿して、目ぼしい作品に採点して選歌したのである。その新しい創刊号の数部を南米堂に届けたことがあった。南米堂は後の南米時事新聞社長の仲間美登里の経営する古本屋、今は消えてなくなったが、ジョン・メンデス工場にイルマン・シンプリシアナ街というのがあって、カテド

ラールがすぐ見えるところに店舗を張っていた。たいてい留守番をしている細君が、古本のシワをのばしたり表紙を糊ばりしていた。ぼくはここで「日光」や「詩歌」など数冊を、歌人のよしみで安くしてもらって買ったことがある。

結婚して間もない中江克己が、み目うるわしい新妻をたすさえて、ミナスのブラ拓鉱山へ赴任する途上、しばらく滞在していたのもそのころである。中江は今でもローマンス・グレイでもてる顔だちであるが、当時はどうしてなかなかの好男子であった。彼の歓迎歌会をビーラ・イーダの樋田陽荘居で催した。出席者は常連で池田が欠けたたけである。ここで初めて美沙子夫人に会った。光田壽夫の姉である。一部屋を本棚で仕った小さなサーラで、歌会は流れて飲み食いはては隠し芸に終わった。後の少女歌人の玲子はまだ幼くて、もの珍しそうに寝室の方からのぞいていた。隣りに武本の義父のポテコまがいの売店があった。その探更、中江、富吉、武本の夫婦組は泊まりこみ、割りこむ余地のないぼくら、徳尾と住佳吉の三人連れは、電車のなくなった時刻の遠い道を、ふらふらと都心まで歩いて帰った。

そのビーラ・イーダへ行く道すがら、徳尾のもらした一言は今でもぼくの脳裏を去らない。急な坂を登って行く時、富吉は臨月の腹をつき出した細君をいたわりながら歩いていた。その後にぼくと徳尾と住吉が従っていた。すると徳尾がだしぬけに、夫婦っていいもんだねえ、としんみりした口調

でつぶやいた。ぼくは妻子をいなかに置いて来ているので、よけいにこのことばが身にしみた。徳尾はぼくと二ヶ月しか生まれは違わなかったけれど、まだ独身ぐらしで結婚をあせっていたのではなかろうか。純情な彼はそれまでに幾人かを恋したが、デートしていた最后の女性をも、ぐずぐずしているうちに取られてしまった。だから彼はいささかセンチになっていた。

そのうらやましがられた富吉は、愛の結晶が年ごとに生まれ、くらしもだんだん苦しくなって行った。ぼくが二年後に出聖して会った時は三浦愛蓄堂の一間に巣くって、文字通りどん底生活にあえいでいた。とうとう池田が苦心して調達した金を握ると、夜逃げ同然にマリリアへ出発した。だが戦争の空白時代は彼に芽を出させた。うけに入ると彼の気っ風は自重をゆるさない。終戦とともに、うまく時流の波に便乗して、かつてのポロンの主は、一躍フアナスチコの旗頭にのし上った。加えて昭和新聞歌壇の選者にかつがれるや、帝国万歳短歌を大いに宜揚して、昔のぼくら仲間の眉をひそめさせたものである。彼はけっしてこうした虚偽の世界に、心から身を投げ入れていたのではなかろう。自覚しながらも脱却できない、彼には個性の弱さがあった。

同胞相剋のいまわしい時期も過ぎ去った現在、彼はどこにどうしているのだろうか。富吉好人よ、椰子樹へ還りたまえ。また機会あらば、昔を語りつつぼくらと一瓢を傾けようじゃ

ないか。

椰子樹も二十年の長い道すがら、いろいろの経緯があり、それにもまして人の身にはさまざまの返還があった。いくたりが寄り来りまた立ち去り、いくたりが永久に帰らぬ人となった。椰子樹が産声をあげた遠いかの日に、夫婦っていいもんだねえ、と咏嘆した徳尾もやがて身を固めたが、やっと苦境を切りぬけて安定したとたんに、その糟糠の妻を失った。武本も住吉も中江も、つまずきのない人生を歩んで来たとはいえ、人の眼には見えぬ苦悩を味わって来たであろう。池田は文才を糧として世を渡っているが、家庭的には恵れぬさびしい男である。

こうして人の身を無造作に語っているぼくも、有為転変のことわりをしみじみ感じている。かつて短歌熱がコロニアを風靡しころは、まさしく天馬空を行き、気慨一世を呑み、かのイタニヤエンの睡浪荘に傲然とかまえ、歌壇の寵児を自負していた。かくて華やけきわが客気も、あわれや槿花一朝の夢と消え、今は一介の無宿人となり果てた。家庭を離れてすでに六年、飄々転々としてところ定めぬボヘミヤン渡世、これもみずからが招いた不運である。この唾棄に価する野放図のぼくをさえ、いたわってくれるは歌の友たち、古きも新しきも、誰かれの涙ぐましい温情である。こうした人びとがあればこそ、わびしかるべき人生の孤独もまた楽しい。

椰子樹創刊当時のような、あの若さ、美しさ、楽しさは二

度と戻らない。それだけ古いねぐらは忘れられない。夢に似たなつかしい思い出である。椰子樹はぼくにとっては揺籃であり温床でもあった。そこから飛び立ったぼくは、たとえ歌を忘れたカナリヤになろうとも、椰子樹のねぐらを離れることはないであろう。

歌誌と歌集

歌誌

○誌名　A・発行地　B・創刊年月
C・主宰と編集者　D・主要同人
E・休刊年と号数　F・その他

○おかぼ　Aアリアンサ植民地　B一九三一年一月　C岩波菊治　D同上　木村圭石　行方南魚　E十二号　F短歌俳句合同誌、ここから武本由夫　中江克己、脇坂一、坪内廣代、秋野愁などの中堅作家を輩出した。

○白日　Aパラグアスー　B一九三七年一月　C渡部南仙子
中須夏山　D同上　E一九三九年四月

●燎原　Aマリリア・アンデス植民地　B一九三七年　C阿部青杜　荒木八雲
D同上　開沼貴代　阿部英子　E二号

○斧　Aクラビーニオス、B一九三九年　C瀧譲二　D同上
大場時夫　森谷風男　吉本青夢　E三号　F文芸綜合誌、各同人が幾つかの別名で多面に活躍している。

○ユーカリ　Aアサイ　B一九四一年　C眞木研一　D同上
晶山充
波沫正夫　E一九四四年

○林泉　Aモジ短歌会　B一九四四年　C武本由夫　D同上
岩波菊地　則近正義　古野菊生　E一九四七年　三号　F戦時中ひそかに発行、戦後は解散して椰子樹の復活とともに合流した。

○和滴　Aプ・プルデンテ　B一九四七年七月　C長島可山
D同上　別府二郎　三浦芽里　E一九五一年七月　一八号
F多くの椰子樹同人が協力してもっとも永続した地方誌である。

○青桐　Aビリグイ　B一九四八年　C佐藤貞一　D同上

開沼貴代
大原友重　E一九五四年五月　六号
○南米短歌　Aゴヤンベー　B一九四九年二月　C小田切劒
小野聖穂
D同上　E一九四九年七月　四号　F旧誌「山茶」を復活して、椰子樹に対抗したが続かず消滅した。
○南回帰線　Aアサイ　B一九五三年九月　C晶山充　眞木研一
D同上　E一九五三年　二号
○蜂鳥　Aサンパウロ　B一九五五年十二月　C志村良一
D同上
新納潤魚　井本惇　南條由喜夫　越村定雄　弘中千賀子　F四枚のパンフレットであるが、唯一の同人月刊誌である。当初のブラジル歌人集団の看板を排して、誌名も「はちどり」とかな書きに改めた。

合同歌集
○書名　A・発行者　B・出版年　C・編集者　D・作者
E・収録歌数　F・ページ　G・その他
○移り来て　A聖州新報社　B一九三七年七月　C香山六郎
D同上須貝さだめ　河村哉太郎　井本惇　上野紅陽　荒木八雲　波沫正夫など、七十二名の同歌壇出詠者　E躍四二〇

首　Ｇブラジル最初の純歌集、特選歌人二〇名の写真と略歴がついている。

○静芽　Ａカンポス短歌会　Ｂ一九五三年　Ｃ酒井繁一　Ｅ春名景水　正木思水　中田武男など十二名　Ｅ三〇三首　Ｆ七一ページ

Ｇ編者に師事する療養者の合同歌集である

○若原　Ａスザノ短歌会　Ｂ一九五三年　Ｃ酒井繁一　Ｄ同上　川原比露思　長友安徳　上村登志行など十五名　在外二十八名　Ｅ一〇四首　Ｆ一〇八ページ　Ｇ同短歌会の第二十一回を記念して発行されたもの。

○木棉の花　Ａ日伯毎日新聞社　Ｂ一九五三年一月　Ｃ武本由夫　Ｄ同歌壇全投稿者　Ｆ八五ページ　Ｇ同歌壇百回を記念して、選者武本由夫が企画したもの。

内容は特別寄稿作品も含む外、論説、批評、感想などから、各短歌会所在地、歌人所録まで盛られている。

個人歌集

○書名　Ａ・著者　Ｂ・出版年　Ｃ・収録歌数　Ｄ・その他

○濤の涯　Ａ物部さち子　Ｂ一九五〇年　Ｃ三百首　Ｄ在伯していた物部赴夫牧師の未亡人　歌風は明星調　富岡清治らの斡旋で出版された。

○山河　Ａ三好綱一　Ｂ一九五二年　Ｄサント・アンドレ日

本荘主人
　廣島県風土社より出版された。
○熱風吹く曠野　A小島正徳　B一九五二年　C一五〇首
D日本にて実費出版一ページ一首の異風なる歌集。
○案山子の詠める歌　A三好網一　B一九五二年　D一八
ページの小冊子　松山市白羊社にて出版された。
○寒温　A酒井繁一　B一九五四年　C七七〇首　D著者の
第二歌集にして、四六版の二五二ページ、窪田空穂の推薦に
より新選短歌業書の一冊に加えられる。長谷川書房刊行。
○微塵　A武田公平　B一九五七年　C一九五首　D天津夢
城、安良田濟、光南極ら、リンス、カフェランジアの歌友一
同の尽力による遺作集、事情のため五年遅れて世に問われ
た。前記三人の外に岩波菊治、中山稠子、武本由夫、瀬崎聲
濤、清谷益次、生野文子が一文を寄せている。
○移民像　A柳田威　B一九五七年一月　C二六八首　C著
者自身の還歴を記念して自費出版された。

同人作品抄

瀬崎　濤聲

来かかりし丘の枯木に啄木鳥のほとほと音を立ててゐる朝

立つ浪の白き沖ぺに一つ居る鯨と見ればこなたにも居る

さ青浪うねる海のひとところ騒立つみれば海豚とび出づ

この年は蟻も剪らねば葉を繁み枝もたわわになれる桃の実

命あるもののかなしさ焼原の木々明るくも芽をふきにけり

にごりみづ速き野川の片岸に流れよりゐて繁る河骨

ひとところ薮のしげみの揺ぎゐてそこに遊べり小猿の群は

子にゆまりさせつつ見やる杜の背の仄明るきは新月なりけり

冬ながら日射しぬくとき山原に竹伐り居ればセンフィン鳴くも

いさかひをする事もなし妻も吾もかたみに老いて頼み合うへれば

行方　　正治郎

厨戸を出で闇探しほのぼのと木槿は白く咲き居たりけり

二ところ相呼ぶごとく梟の啼きつつ移る月の野原を

我が前に備へられたる一筋の生命の道は永遠に光れり

丘のべに沈む彗星はあかあかと光芒ながく天にあげたり

いかめしき鐵の窓より打仰ぐ夜空は澄みて星の降るがに

顧みて悔ゆるものなし定まれる試練は耐へむ心静かに

掠奪法の易きに就きて利を追ふに一途なりしが顧らるる

新しき世代に生きむねがひありて昨日の吾ははや古きもの

武本　由夫

野原に並びて立てる童たち汽車に対ひて双手を揚げぬ

ワイヤーのにぶき唸をききしより汽車の降下が意識にのぼる

木苺の花咲く丘の夕まぐれ坂道くだる霊柩車見ゆ

四度目の転居の荷物まとめつつ馴れし手際を妻がなげくも

夕ぐれの空の穏しさうつうつとヂンタの遠音に我が感興す

匂やかな枝かいくぐり色づきし山椒の粒を掌はこき入るる

覇王樹にからめる蔦の芽は萌えて眞陽に耀よふ飴色ながら、

物質をあつむる術は知らずしてあざけられつつ古書読み取る

嘗て我合力を乞ひし事ある故に出放題をも堪へて言はしむ

宿酔の頭叩きつつあくびしてそれからおもむろに教場に入る

徳尾　渓舟

身に浸むるものも無かりき人の死にし話を当然の事のごとく聞く

保ち来し我が秘め事を洩らせしは酔ひて感傷的となりし心か

訪ね来し父は追ふごと帰しつつ口惜しさ多し勤持つ身は

一世遂に足る日も無くて老いし父が言ふことは多く金に関る

見る目には厳しき人がその妻をいたく優しき声にて呼べり

勤持ちつせかせか通ふ夜学には無茶苦茶に眠き一しきりあり

諸々の思は断ちて今はかも我に一人の人を決めなむ

一すじに働き来にけり髪の毛のうすくなりしを人に言はるる

池田　重二

十年前の古き日記をなつかしみ掃除なかばに立ち読みにける

才能のなきを認むれどなほもまだ筆すてかねて小説つづるかも

葛西　妙子

真摯なる恋にしあらば二つなき身をも魂をもかけましものを

明日をだに知らぬ生命なり眞向きに君の便りを待つと告げ来ぬ

温き母の乳母をひと日だに吸はで冷たく吾生ひにけり

あかつきの霧ふる中に鋏ならし濡れたる胡瓜きるは親しも

群鳥の遠ゆく後を見やりつつ吾は寂しる葱の皮むく

燃ゆる火の炎とまごふ我が性に堅く結べる氷夫はや

天地の終に逢はざるそれに似て君にまみえむ日もまたあらじ

これの世に一人の生命産み出だす辛らき悩みの息に触れにき

暈させる月の下びに青みつつ明日たち行かむ街ひそまれり

枇杷の花盛り過ぎしは蕊長くまつはる虫の影動く見ゆ

開沼　　貴代

雲とびて椰子の葉づれの高鳴ると見し間に早も雨は落ち来ぬ

自がまきて培ひ育みし此の稲の重き垂り穂にふれつたぬしも

労働のはげしくなりてやつれしを夫と言ひつつ佗しきものあり

ゑまふ兒の唇より垂り落つる涎は透きて水晶の如し

老いまさるみ姿遠くしのぶのみ古郷の母に会ふぺくもなし

乏しさを時には嘆け山住みの穏しき業に足りて在り経る

十年余の我等が汗の浸める地ぞ荒れゆくさまは思ふに堪へず

雨の中汗あえにつつ新墾のかりばね起し草花植ゑにけり

離れ住みの吾娘眞愛しや文毎に体いたはれと書きてよこせり

坪内　廣代

木洩れの日のはだらに透る竹林の奥処によどむ蒼き貯水池

朽葉ふめばしくしく歎くかなふるさとをわれの遠く遠くあり

わが母は生きて在せりまことにも生きて在せり遠き母国に

谷合を汽車にてすぐる沼の辺の白き花みな揺れて光れり

不二山　南歩

碧空に白いヨットが来りミシン踏む少女の瞳は春を呼んでる

黒樹園の明るさ緑の脚光を浴びて私独りゐる

沈黙の季節が回転する—重い歩調は私をメランコリーにする

一瞬の発車電鈴に君の最後の言葉は聴きとれなかった

線路の側の夏草の愛しき擦過した列車の風圧に耐へてゐる

時雨する街の茶房にゐて冷えゆく珈琲をかきまぜてゐた

西田　季子

そぼぬれて行ける人あり山煙り墨絵の如き雨の夕暮

葡語の綴り一々娘等にただしつつ請求書かき領収書もかく

母我にすらも秘むるか経水の事はさり気なく仕末してをり

思ひ出に泣く日もあらむかく睦みかく争へる三人の娘等よ

母病めば一日の家政滞らずあれば礼いふ子等に向かひて

幸福とはかかるを云ふか風の夜も頬赤き兒傍に眠る

はらからに反きて嫁ぎ子をなせし若さ想へばかなしきものを

吉本　　青夢

まだ妻と呼ばざる前の汝が文の字は細くして正しかりしが

まぐはひをなしたる後もなほ語るいたく更けしに旅の話を

女の子を産みてすまぬか吾が妻が笑みて愛しきもの言ひをせり

情かけし多くの人に嘆かれつ父は一代を終へ給ひけり

海鴨は磯ゆ飛び来て朝光の浜の立木にしばし鳴き居つ

工房の窓に時をり寄り行きて息づくは魚のあぎとふ如し

あぢさゐの花衰へし荘園に潮のしぶきは霧らひ流るる

河のごとく海峡に青き潮流れ風はらみたる白帆すぎ行く

何を食ひ生き居るものか日もすがら海に光りて水母の動き

相抱く二人をファロレッテに捉へしが消して添ひ行く波光る渚

天津　夢城

酔ひ倒れののしり疲れ老い父は妹に手足もませゐるなり

あくがれの募り来る日は幻に小さく書きぬ箱庭の如き日本を

三人の兒に一日かかづらひ夜に入れば妻の眠りの速やかなるも

はかなき歌の数は詠みつつ外国に生れし者の嘆きせりけり

日本とたやすく呼べど面影のくにの名にこそ感傷はあり

一人在りて心愉しき企ての非規実性は覆ひがたきもの

荒潮の群れ崩れつつどよむなる海にむかひてほとほと哭かむ

河村　哉太郎

馬の背に照る日のよはしあへぎつつゆけばつむじの風にあふ昼

みごもれば此頃愚痴の多き妻のふるさとを遠き身を嘆くかな

マラリヤと思ひて疑はす買置きの注射はさしぬ熱のひけまを

貧しけれどゆとりありげによそほひて縄の煙草は刻みてのみぬ

妻子いねて静もる春の灯によりて爪切りをれば亡き人憶ほゆ

生きの身の逝くべきさあれこれの世の一人の母の今際に泣きぬ

百姓はもう嫌と云ふ妻よなほ耐ゆべしわれの希望頼りて

痛む眼にとめどなく涙ふきつしみみに想ふ嘆きが一つ

咲きふせる聖ジョンの花の原廣く草木の青もいよいよ乏し

盛上の崩れむとして波頭にぶき光は瞬間にして

安部　栄子

夫と子と安けく在れば天地の何処の果に住むとも嘆かじ

あらそひて言ひ伏せられし怨みさへ懐しきかも離り寐ぬれば

夜の街のどよめきの音うち絶えて日の光は高照らしつつ

登りゆく高原電車すれすれに咲き盛り居りクワレズマの花

霧探き林の中を風吹けば滴は落つる雨の如くに

月々の経費高めど詮もなし吾子等四人を学校にやれば

頂上は吹く風寒く向かひ立つバウーの岩に霧雲去来す・

唐澤　恵津子

心弱く黙せしままに別れ来し人の恋しきこの日頃かも

我が婚約成りしを祀ふ遠国の伯父が便りは身に沁みて嬉しき

ひそかなる吾が願事の成る如くうつつともなし海に向かひて

去年よりはとみに減りたる我髪とすきつつ思ふ語るともなく

炊きあまる飯は干さむと西向の日溜り選みうすくならべる

玉葱の煮え立つ香り流れ来て母が厨にゐます幸福感

中山　稠子

癒ゆるなき病ながらに生ける間をよろこぶ友の手紙に泣かゆ

黄昏るる庭木の葉づれ爽かに雨よばふ風の音ぞこもれる

夕闇の明かり落ちゆく丘の上の太木のうえに大星光る

な見すてそ百姓われの草伏しに吐息つきつつよめるこの歌

いみじくも古りにし辞書をねもごろに繕ひつつ思ひは足らふ

冴えまさる朝の井戸べに妻と嫁こゑ和やかに菜を洗ひ居り

余るほどの金とて無けれ吾娘といふは可愛ゆきものよ

少し呉れて来ぬ昏れのこる地平の空の夕明りいまとどろきし

飛行機がゆく

破れても山河清く在りといふ懐へばひとり夜半に覚めつつ

時世後れて歩める我とおもはねど年を積ればふるき部類か

井本　惇

暁の時の移りの眼にしるし家の白壁に光動くも

夏空の雲がくりとぶ飛行機の音のたしかさ光る銀翼

ジャラグワイの穂向になびく夕煙あはあはとして草にこもらふ

黍皮にきざみ煙草を巻き給ふ吾が老父の骨太のゆび

後陣痛遠ぞく妻の辺にありて自づからなる息ふかくして

かすかなる流れがありて渚べの砂のひくみを海に入り行く

すすぎもの夜業になして吾が妻よなれも日本の女のひとり

あり在りて相慰めむことすらもはかなくなりて今日妻と居つ

ひとつ家の吾家をめぐり風吹きて夜の孤独の情にひびく

創意なき歌のいくつをものにする欠詠せざるのみの行為に

清谷　益次

手に取りて泣きし現の別れには面そむけて我は立ちにし

天の川傾きながらなほしるし棉をつむぺくいでたちにけり

月照れる澤辺の草をくぐりつつ脚赤き鳥は鳴くにやあむむ

老い父母をおきて都会に来りしがわがなすは新聞発送の業

我を送ると発車まぎはに来りたるをとめ散歩を走り近づく

勤待ちて遠く通へば朝夕に子を抱き上げてやる事もなし

悠久なる時の流れの何時までも保ちてあらむ高層建築の群

脇坂　一

畑うちて生くべく我は生れ来ねはろばろここに移り来てまた

ひとわたり永住論を説き廻り永住論者は国へ帰りぬ

次の蚕飼ふには暫しのいとまありて妻が樹かげに眞綿むき初む

離れ住みて祖国のさまを批判するは亡命政客がるらぐ如しと思ひつつしむ

ただ「善良なる歌人」と云ふのみにては勤まらず悪辣なるには挑みてゆかむ

ぎりぎりのところは秘めて歌によまず埋火の如く胸にあたたむ

別府　二郎

ひやひやと霧の流るる朝の畑に棉つむ妻の首すぢ白し

くりや事する程に妻は癒えたれど歩む足首は未だ弱々し

病持つか弱き身故呉服屋の店員となりて十年を経る

過ぎし日の事に触れなばかくばかり睦みはすまじ父も子我も

川原　比露思

春あらし今日も一日を吹くならしバルバ・デ・ポーデの草光りつつ

夜に入りて樹海を渡る風の音潮騒に似しといねて聞きをり

高層建築の群はさ霧にかくろひてしばし見て居り狭き視野の中

病院の白壁にかげさし昏るる時階上に忽ち讃美歌おこる

年経れば若かりし日の情熱も沁々としたものにかはれり

朝抜きしいくぱくの大豆を午過ぎの日向にて妻が叩きて居りぬ

彼の部屋に患者らが唱へ祈りし声ひそかなる夜の幻聴となる

生活の憂愁はいづへに吾が遺らむ萌え出つる草に光あまねく

遠く来て今宵安らぐ父母が家にに時雨のひびく音きかむとす

上村　登志行

今はただ心しづめてわがあらむ秋づく光の空にみちつつ

コップデレイテの花咲く見れば自らお盆の近きが沁みて思ほゆ

病害ひどきピメントンはおほかた抜き捨ててレポーリョの種
子蒔く諦めるとなく

波音の絶え間なきこの海岸を青き電車が笛鳴らし通る

中江　克己

鉱山に住む物寂しさ言はねども妻の立ち居の静けかりけり

坑底に呼吸塞迫を覚えつ瓦斯発生を検めにけり

鉱山に住みうら慰めむすべをなみみごもる妻の心昂ぶる

山の沼おほふ木立に夕早くこもらふ風は音に立ちつつ

蒲の穂のほほけしるけき沼尻の湿れる土にトマト培ふ

門先にゆまり放つと此の夜更け酔痴れ我ははばかるとせず

仲眞　美登里

あきうどの歌詠むことはふさはしからずとためらひにつつ過
せし幾年

欧州戦乱のニュース頻りに叫びをり心ひかれて購ふ新聞

酒井　繁一

子の遺骨瓶に持ちつつ幾年も鎮めは得せで落着きの来ず

吾と友と同じ生活の位置に居て幸福の見解をいたく異にす

ほがらかに君語らへば足なえて常臥す人の陰影もなく

海ほどに青き空なり幾日か無精に過ぎて仕事する朝

焼きつくる如き歯痛に飲む薬粒一つにて匂ひさへなく

花立に一輪花を書きくれし画家も遠くに移りゆきたり

内容のひどく異なる本を読み妻とかたみに眠らむとする

大原　友重

身につかね我に耕すなりあひは切なくあれどうべなはむとする

掘り捨てし龍舌蘭の一株が根づきてはびこる鋭葉たくましく

恙なくかたみにあれば相会ひて語るに多くの嘆きは持たす

店守りて心もとなく我が居れば朝より電話のベルしきりなり

活動範囲の狭隘をかこつ君も又恵まれずして早く去る一人

喧騒の巷を避けて帰り行く今宵も暗き坂を下りて

捗らぬ外務の一日悔いありて夕べ力なく縋る電車に

本庄　研一

降霜の畑を巡れば青葉蒸す匂ひはいたく胸にしむなり

商人を不正なるものと言ひ放つ一人の客のせまき社会観

ひげを剃る虚しきときに忘れゐたる大切な事が胸に浮びぬ

銀翼の反射の光影が眼の下の地上に映えつつ機につきあたる

露店商人がアルミ製品を片づけをり夕かげりきし町の工場に

百日紅の花咲きつぎて朝毎に眼ざめくるしき我のおとろへ

虚しさにたへがたくをり草枯るる丘のかぎりは夕暮れにつつ

子と風呂に入るは早退けの夕べにて小さき耳うら洗ひてやりぬ

大場　時夫

はきはきと客に接する吾が妻を厨より見つつ朝餉を済す

塀越しに糸瓜の花の咲く見れば既に尺余の実をひそめゐし

妻のあらを麗々しく歌にする奴と面紅らめて激する翁

瀧壺のとよもす音にうちふるふごと昇り来る湿り持つ風は

今度のはおでこではないねと伏目にて産褥の妻は囁きかくる

戸をくれば靡く柳の下枝にてるてる坊主は向きを変へたり

米澤　幹夫

伐られたる森林地帯に目もはろに続きて緒き開墾新道

恵まれざる生活に喘ぎいささかの融通に媚るは卑屈ならむか

友待つに疲れて座る公園のベンチに伸び来る噴水塔の影

冬の日は静かに照れり街角のひ溜りに靴を磨かせて居り

口笛を吹くかに屋上のアンテナは鋭く鳴りぬ疾風の中に

則近　正義

幾日かあたたかき雨降りしかば小米櫻は返り咲きたり

松葉杖つきし少年が敏捷に雑踏の十字路を斜に横切る

鸚鵡樹の赤き若芽は目に立ちて昨夜のしぐれに色ととのひぬ

捨て鉢に「どうせ私なんか」と泣く妻よああこれが愛情の生態であろうか

物も言はす過ごせし妻が寝る前に口紅引きて抱擁をせがむ

たった一首の推敲に苦しみて十時過ぎぬ莫迦々々しくなりてペットにもぐる

地平線の雲の茜は薄れつ刻々昏れゆくモンソン高原

上野　紅陽

芹の葉の青き繁みの下くぐる水を掬ひて顔を洗ひぬ

吾等背負ひ育て給ひし母の背の暫し見えつつ汽車去りにけり

週に一度の朝市を待ち簡単に喰べられる物を選みては買ふ

酔痴れて巷にさきよふ夜もなく吾は亡くなりし父に似しなり

屋上に芝繁りつつ伸ぶる見れば過ぎし悲しみ吾は想はす

日のひかり薄くなつつミレの花ゆれ静まりし丘移りゆく

雲形のひまなき丘に草敷きて孤独なりミレの花と居れば

谷　佐稚子

月かげの照りわたる裏庭にま白き海芋の花が目に立つ

合歓の花咲くをし見れば姉嫁きてたはやすく過きし三年思ほゆ

宵早く新月しづみたる背戸庭に梨の葉散りて音立てにけり

光田　ひさを

昨日強く叱りし女工が今日ひと日媚るがに吾に対へりあはれ

街路樹の一つの蔭を踏みゆきて又新しき蔭に入りゆく

縁談の二つ三つを断れば早や人の目には奇異に映るか

隔てある思想の中に対ひ居り二十四の君と二十六の吾と

所在なく頬杖つきて居るときにいたく亡姉に似てゐると人に言はれぬ

文学青年と半ばあなどりて人は言へども「馬鹿息子」だと言ふよりはましなり

結婚が現実感となりて迫る中に独身の気易さの捨て難てぬかも

安艮田　濟

四つ五つ若くみられて秘かにもよろこぶ齢になりにけるかも

二百を超ゆる十米の鉄筋の柱は大地に打ちこまれゆく

眼閉づれば平行線なして迫り来る波の白きが消ゆるともなく

習慣は第二の天性をつくるてふこの頃嘘も平然とつく

道にそひて現るるさまざまの広告の図案も批評の対象となる

肩並めて歩きつつ今はふるるときただの處女との蝕感ならす

円心をめぐるがごとく思考なく結婚の日は迫るひと日と

光　南極

合致する波長に目守りあはすべき作業は神経の緊まるひと時

地の涯ゆみなぎる光さし初めて我は眞向ふ祖神の国に

消えむとする生命のほのほかき立てて歌詠みにけむ瀧澤正は

ズボンのはためきを脚に痛きまで感じつつ居るよ自動車の上に

云ひよりて来りし者よ何事ぞロテリヤの札に騙らむとするか

モートルの乾燥作業夜に入れり歌誌をば少し読まむと持ち来

中井　芙蓉

母いまは世に在さず眼対にしぬびまつりて生きむ吾はも

去年よりの編みさしの上着日を経るも捗らずして冬ならんとす

激しき労働身に応へ来る年齢となり娘らを頼みて生業つづくる

子を背に雨夜の線路走るごと吾は隨きて行く夫の後より

葉を落しつくせる樹々の枝の間あらはなる巣に陽の照りそそぐ

米川　久

敗戦を夢疑はぬ吾れなれど「沖縄の最後」は読むに得たへず

だまされし事に気付りこみ上る怒りおさへて席を立ち来ぬ

連日の雨にたたかれて桑の実のしづくは赤く土をそめたる

地を蔽ふ如くに繁る桑の木の日蔭に入りて馬を休ます

倒れたるコスモスの花起しをり今日はやさしき吾のふるまひ

東野　暁風

看護りつつ心疲れててまどろみぬ時計のベルに覚めて注射す

給料の枠中にてはくらせぬといふ妻の欺きはうぺなひにつつ

娼婦二人多勢の中に棉摘めりけばけばしければ人目にふるる

辞書を引く根気も失せてブラジル語の解らぬところはそのまま読みすぐ

標識燈赤く灯りて放送所の鉄塔高く明け渡る街

南條　由喜夫

長病みの妻が日増しに甘ゆるをとがめることもなく看りをり

棉を積める自動車を捉へ街中に舊債を迫る声荒々し

歌会につくす半ばでも教会につくして欲しと牧師言ひ来ぬ

家族らが六十キロのものかつがせずわれもかつぐ気をおこさすに過ぐ

生温るき風に裏がへる芋の葉にばりばりかける強ボルドウ液

献金は自由にせよと言ひしより異端者の如あつかはれをり

戸崎　清作

草深き吾が棲家なれば灯に群るる虫気にしつつ子ら夜学する

貧もいはず粧ひもせず十年を我に副ひ来て妻も老ひつつ

金借りに行きて借りられす犬に噛まれし記憶よみがえる叉金の要る頃

投げやりの子の習癖を父われに似しなりと妻が焦だちていふ

簀藤　勝子

家近く帰れば子等が焚く風呂の落葉の煙にほひ来るかも

病癒えて夕餉に並ぶ子の頬にバルダン注射液の青きしみあり

椰子並木の街の印象もおぼろなり医師の言葉に怯え歩みて

癒え難き病とは知れせめて子等が成人の日迄は生きたきものを

吹本　菊子

燃え難き薪の湿りをかこちつつ苛だつ嫁はマッチのみ擦る

無表情に邦画眺める夫人らの席に隣りて涙拭くわれは

朝毎に冷えまさり来ぬ紅さぴし庭の鶏頭見つつ掃きをり

坦々たる我家の前の廣き道を稽古する自転車の幾台となく通る

玉木　五男

教会の展根の尖塔のりんかくがするどく見ゆる夕映の空に

眼交の山いただきの草焼けて岩肌白しところごろに

山焼の沖天をつく煙さけていま飛行機が旋回しつつ

迫り来る夕立雲を背景に送電塔の鉄骨白し

山頂の松にふれつつ天くだる霧は小暗しカンボス高原

弘中　千賀子

心通ふ温とさ思ふふろしきる雨夜の部屋に夫としあれば

締切りにおくれず出せしに我が歌の一首だに載らぬ椰子樹第二十六号が来ぬ

廣やかな草生に座しぬ久々にロマンチックな心地になりて

愛される幸が今更身にししみて冬陽の庭にうづくまりゐる

梅崎　嘉明

色も香もなき写真暗室に腕時計のその音のみのたのしき孤独

眼ざしにその愛情を知りをれば言には出さす婚約者われ

信号燈変わりて路を急ぎ行くに「何時ですか」と近寄る女

草枯れし原の斜面に様々の形態なして立てる蟻塚

些細なる事にもすぐに泣きし妻年立ちて強く反対をする

汐匂ふ風は浜辺に吹きそよぎ妻の稚毛耳にほぐれつ

越村　定雄

焼きながらすすり食うぶる貝の味ほどよく海の塩を含めり

逝きて八年妻の面影うすらげど娘は今も詠む母恋ふ歌を

いそいそと片仮名読本包む兒らよ今日の授業は楽しかりや

吾独りの愉楽に耽ることもなく重き鞄を提げ帰らむとす

高林　明雄

教会の夕べの鐘のうら寂も咽喉を病みつつ一日こもれば

清水湧く狭間のあたり草枯れて流るる霧は北にし向かふ

水涸れし谷の川原に砂見えて灌木林を遠く横切る

星の夜は庭に走りて心足らふ過去にも幸の幾つかはありき

渓間なる池水澄みて静かなり吾は来れり独り居りたく

小竹　清子

年を経て鎮もる胸ぬちに夫の影さやかにうつるを我が喜びとす

みんな良い選手になれよとサイン残し去り行く宝井氏に子等が手を振る

感情の昂ぶりは遂に云ふまじき事をし云ひて子をば泣かしむ

娘の調度運び出されし塵の中へヤピン二三散りてゐたりき

個性強き娘の嫁ぎてより朝夕のしきたりいささか緩漫となる

吾がかひな支える人に寄りてゆくシグナル変りし雨の十字路

森重　扶美

硬直せる母のなきがら拭ひつつ空ろ心に沁むアルコールの匂

卑猥なる唄にも堪へて妹よ今宵妻となる感傷にゐるか

休み休み深井の水を汲み上ぐる産月近き身をいたはりて

出張せし夫のかへらぬ幾夜さを読み次ぎし「レ・ミゼラブル」も今宵終りぬ

帰る日を夫にかく聞く慣しのいつまで続くと思ひ佗び居り

坂　光男

刺激なき生活とぞ思ふ夕迫る厨に完全ランプを磨く

午後の汐高み来れば砂の上に脱ぎにし着物の位置をおきかふ

埋め終へし柩拝むと傍の石碑に皆の帽子置かるる

雲間より月出でたれば対岸に泊てゐる白きランチ見え来ぬ

パルミット下すカノアの中にして白く湧気立て物を煮て居り

前山の傾斜の稲の花咲きて草除る少女も来なくなりたり

志村　良一

灯ともれば仕事仕舞ひもそこそこに憑かれし如く家路を急ぐ

カンブシーの木の実は青く算盤の珠の如くに数多垂れたり

せんだん草の針はさけつつ山襞に湧ける清水は飲むべかりけり

道の辺の雨におかれし地均機の汚れて土の赤きしづくよ

阿部　パウロ

冷戦のはてに爆発したる朝鮮の南北戦を夜のラヂオ告ぐ

濱すみれゆるる群生の道行きて赤きひとでを吾はひろへり

夕靄のあるかなきかに沈みゐて泥臭ふ濱を渡場に来つ

祈り居るうつろの母を吹きまくり風はいづことなく空に鳴る

西田　孝徳

店を閉め食後をかたづけ火のし掛くる妻に肩もますをたのみにくく居り

生活費の高きをなげく女工さんも日曜日には美しく装ひて歩く

選学運動の拡声器止めば雨の音静かに聞え来る夜に返れり

見苦しき症状の人に立ち交り妻も並びぬ癌病院診療受付所

紅月　伯舟

茄子の根に少しばかりの施肥終へて今日一日の佗しさも過ぐ

紅うばらすがれて凋む窓とざし夕べは早きあかりを灯す

さはやかなる愛情を浄く祝福されて長き抱擁するを見たりき

誇らしき青春を過去にもたざれば我が空しさの尽きることなく

蜂雀軒つたひとぶ日もありて四月ひそかなる明け暮となる

新納　潤魚

脳圧を訴へつづくる妻の掌をとりで仮睡む窓の白めば

裸木の翳にかこまれ早春の芝生に少女裾ひろげ座す

我が座するマットの落葉踏みつくる獣は我より寂けきものぞ

石をもて割りしデアタイの実を含む子にインヂオの表情は顯つ

平松　霞

ヴァゼンもぐ腕をつたひて腋下に冷たき雨の零したたる

緑葉の繁みにゆらぐセンダンのとぼしき花も終りなるべし

街の灯の余光をつけて我が歩む山沿ひ道はほのかに明るし

かたくなに物言はず一日過ぎにしが少しはにかみ夫の邊に臥す

古鶏舎取拂ひしかば町の灯が近々と我が庭より見ゆる

片岡　けい子

色あせて散りにしマモンの花ながら一つ一つに露をふくみつ

死に近き人臥す窓は閉ざされて庭にプリマベーラの赤き花咲く

夕闇のせまれる枯野の原遠く汽車黒々と過ぎゆきにけり

傷みかけしバナナは別の箱に別く靴みがきの子等が買ひてゆくべし

小笠原　富枝

ささへ持つ紙箱の中の絹豆腐軟体動物の如くゆれをり

一房の松の細実は光りつつこぼるれどなべて実りたることなし

街燈の照らす距離内にて吾が影の伸縮するを見つつ帰り来

切売の西瓜にかけしセロファン紙が波状をなして返す夕光

八巻　梅夫

かへり来て独りの部屋の窓開く月は窓より位置たかからす

街路樹は枝の太きよりおろされて俄に明るき舗道となりぬ

カテドラールの角にてゆきあひし年若き婦警はフランス風の帽かぶりゐき

大島　進

公設市場の窓硝子に西日が反射して我が分解せし時計を照らす

霧深く流るる街角にポンの香を残して小型配給車消ゆ

随想

中山　稠子

椰子樹五十回記念号を出すに就て、何か当時の思い出を書けとの事だが、その頃奥地に居て、創刊に就ては何も与り知らなかった私に取って、そうした思い出は別に無い。只ブラジルに来て文学をやる事など予想もせず、又そんな方面には断念した積りで居た頃であったから、それを知った時は、何かほのぼのとしたものを感じ、俺も一つ変って見ようかという気になった。どうももう二十年も前の事は、良く覚えて居ないけれど、一人として全然知らない顔計りのメンバーにも、何となく親みを感じ、取敢えず怪しげな作品を比較的傾向の似通った阿部青杜に送って見た所、最初からいきなり岫雲集の筆頭に採って呉れた。残念なのは知らぬ乍ら創刊号に逸脱した事で、併しそれ以来つい同人の仲間に入れてもらい、爾後運命を共にして現在に至って居る。

今でもそうであるが、創刊当時の椰子樹は、誰を中心と云う体系が在ったわけではなく、選者鼎立の形の中に、相寄る極めて大雑把な和やかな揺籃に過ぎなかった。併しそれがお互いの親近感を誘い信頼し合って、その後の推進に大いに役立つ事になったのだから面白い。

大体私は歌は若い頃、長谷川銀作などと投稿仲間で、或期間牧水に師事した事はあるが、生活と会社の激務に追われて自然短歌などには遠ざかって居たし、大して興味も持たな

かった。だから渡伯後も新聞などで時々見るブラジル短歌、殊にアララギ系統の歌には何としても親しめず、むしろ反撥を感じて居たものである。椰子樹に加盟してから後もこの考えに変りは無かった。終戦後は椰子樹の様相も大分変わり、一時はほぼ岩波菊治に統一された傾きもあったけれど、併し私としては、短歌の上で彼に傾倒し、その作品に魅力を持つことは出来なかった。それにも拘わらず、友情の点では最後になる程、親密の度を加えた事は不思議である。今椰子樹に関する過去の思い出として、私の胸に浮かぶのは特にこの事で、具体的に云って見れば、弟子共に対する愛情、同輩を遇する礼譲、然かも決して封建に流れぬ所、普通の人間には出来ない事である。その人間的な彼の人格が、椰子樹の上に公平に反映して、椰子樹を今日あらしめた基底を成して居ると私は考える。短歌の世界に、境地よりも友情信頼するものを死ぬ迄示して呉れた。彼の人間性を私は尊いものに思う只恨むらくは交遊日浅くして、幽明を隔てて了った事が惜しまれてならない。彼の死後非才をも省みず、椰子樹の運営に関興してるのも、詰りはその友情に繋がるえにしとでも云うか、短歌を愛する眞意も亦この精神を度外視しては価値はあるまいとおもう。

椰子樹も最近は、母国歌壇との活発な交流と相伴ってほぼ一定の標準に達し、各人の志向や持論も、ややはっきりした

独立性へと進みつつある事は大なる進歩と云えよう。一体人間が生活態度のうえに確かりした自覚と、目標を持つようになれば、いい加減な妥協は出来なくなるのは当然である。この事は短歌の上にも云われることで、結社の対立となり勢い排他的論争の展開となるのも叉止むを得ない事をある。椰子樹もどうやら今その段階に近すきつつあるように思われる。

考えて見れば、私などの世界はもう過去のものであり、日に日に流動する新生の流れに従うには、もうとても堪えられなくなった。

これからはせめて一人の境地を守りもっぱら、静かに歌壇の将来を眺めることにしたいと思っている。

巻刊前後の思い出

瀬崎　濤聲

創刊号が出たのは、私がミナス州在住時代で一九三七・八年頃であっただろう、やっと珈琲園コロノの足を洗って、モヂアナ支線のサクラメント駅から四、五キロ離れたアンテノール・ド・アルテ耕地に移った私は、米作のフハスト・ステップを用み出すとともに、ぼつぼつ歌作も始めて、時々邦字新聞ブラジル時報に発表した。時の時報歌壇選者は徳尾渓舟君であった。その渓舟君から或る日手紙が来て、かねて計画中の歌誌を創刊する事になったから貴兄を同人に推薦す

る。早速諾否の返事が欲しいとのことであった。こうして発刊された椰子樹はもう五十号にも達する。遠い過去のような気がするのも当然のことだ。二・三号で終末を告げる雑誌が多いのに、五十号が出るとは芽出たい限りで、関係者の方々に心から感謝したい。

薄らいだ記憶を辿ってみると、私が徳尾・武本両君と織り合ったのも椰子樹発刊前後であったようだ。米秋も終った日、私はアンパーロに土地視察に出掛けた。その帰途足をのばしてサンパウロに出てみた。そしてルス駅に近い放宿に一泊したが、宿の主人の案内で道々見物しながら今のジョン・メンデスまで行った。そしてその頃軒を並べていた邦人商店の一つ、仲眞氏経営の南米書店に立寄り、同店にて徳尾君に来聖を電話し宿所への来訪を求めて帰った。

旅宿の宵の口もすぎた頃眼鏡をかけた二人の青年が私を訪れて来た。一人は小男、一人は大男、小男は徳尾君、大男は武本君であることは説明するまでもない。こうして両君と初の対面をしたのであるが、初対面の感情は親愛そのものであった。談は云わずもがな短歌一辺倒で深更に及んだ。懐かしい思い出のひとである。

椰子樹と私

清谷　益次

椰子樹の創刊は昭和十三年で、正に二十年の歳月が経っている訳だ。その頃私はソロカバナ線の奥、サント・アナスタシオという駅の農村にいて青年期の初めにありがちな何とも知れない焦燥感にとらわれて、はけ場所のない不満な明け暮れを過していた。いろいろなことが身辺にあり、とめどもないもろもろの想念によって頭の中が占めらていた。新聞や雑誌に自らの稚い作品を投ずることにより、同じ紙面に現われる幾多の人々の名を覚えて懐しんだが、個人的に織っているのはひとりもなく、まして短歌雑誌を発行するというような動きがあるなど知らなかった。全くの田舎者だったし、積極的に連絡をとろうという乗気持ちもなかったようだ。

椰子樹を最初に見たのは兄に送られて来たものであった。間もなく私は、椰子樹中央同人の名で、同人に推薦するという通信を受け、同時に作品批評を命じられたが、これは他の作品に対してモノをいう最初の経験であった。ことことに到つたいきさつはもはや記憶にないが或は兄に送られた創刊号に刺激されて、投じた一連の作品が、多少目に止った故だったかも知れない。

数年後、サンパウロに出てからは、いわゆる「歌につながるえにし」とやらで短歌作者たちとの接触が多くなり、それは今日まで続いているが、創刊に参加しなかったのはもちろ

んのこと、どちらかといえば、私は椰子樹に協力するよりも、文句ばかりいって来たという気持ちがする。編集にしろ経営にしろ、自身がその衝にいない責任のなさと、例の「つながるえにし」の気易さからか、勝手放題のご題目を並べた傾向がどうも顕著ではないかと、今度編集部書信を受けて殊さら反省させられるような想いなのである。

椰子樹の主流をなすものは今は故人となった岩波さんを中心とするアララギ的な歌風だとよくいわれ、世間でもそれで通っているらしい。池田重二が何かに書いた文章の中で、私も岩波門下のアララギ的歌人と呼ばれたこともあるが、実をいうと比較的遅く中央同人との接触の始った私は、岩波さんに教え導いて貰うという機会と幸運にも恵まれず、歌誌アララギも、アララギ歌人の歌集も殆ど読むことなく過していた。もともと私の拙い作品には主情的なものが多く、アララギ的な手堅い表現のものは少いのではないかと思っている。私にはむしろ、短歌に心惹かれ始めた十五、六才の頃に親んだ北原白秋、若山牧水、或は木下利玄といったところの、それもこれら歌人の極めて若い頃の作品の抒情性が大きい影響を残したのではないか、という感じがする。いってみれば、世に言うアララギ的をものからは遠いところで、得手勝手に歌を作っていたというのが実体であった。

このような得手勝手な作歌態度で手堅い表情への不勉強または主情的なもの人間と人間のかかわりのあわれさという

ようなものに心惹かれて、作品の素材としてより多く扱う傾向に、作歌を継続する上での方法的欠陥や、「短歌の本質」を逸脱しだものがあったのか、或は短歌に求めるものが大き過ぎて意識過剰となり、作歌実力がそれに伴わなかったためであろうか新聞記者という煩わしい生活に入ると殆ど同時に、私は歌を作ることから次第に遠ざかって行った。

歌を忘れた私は、幾度も椰子樹同人として扱われることを辞退したが、結局そのままになっている。これは全伯短歌大会を主催する新聞社に記者としていたため、幾分かは利用価値があったためでもあるだろう。

これまでもそうだったが、経営と編集の上での椰子樹の困難は今後一層困難となるであろう。しかもこの困難は、過去の戦争などという特殊な事情から来るものとは異り、日本人コロニア自身の性質の移り変り（移住して来たものの老齢化とそれに伴う文芸などの熱情の一般的な遇潮や、日本語使用層の減少等種々原因を奉げ得よう）から来るものであって、悲観的な見方をすれば、今から十年後に、椰子樹という短歌雑誌が果して存続しているかどうか判らない、とさえいえると思う。五十号記念特集が、短歌の上で、どのような意義を持つかということは、なお幾年か後にならなけれ考え及ばない事情に属するであろう。

しかしまた私だけのことに限ればこういうごとも考えられる。歌を作ることに費いやしたエネルギーは決して現実生活

の上で実を結ぶことはなかったし、むしろ実際にはマイナスになったことさえ多いのであろうが、今に到っても、作歌を通じて生じた人間的関係にはなかなか容易には得難く尊重すべきものが、たとえ僅かとはいえ残っており、このことは永い生涯の中では無形の宝ものの付置を占めるであろう。

椰子樹創刊への回想は。そのまま私自身の過去、殊に青年初期をふりかえるよすがとはなる。

『燎原』の廃刊と『椰子樹』の創刊　　河村　哉太郎

椰子樹の誕生を見る前年即ち昭和十二年、マリリアのアンデス植民地に阿部青杜先生が、当地の日本語学校で教師をつとめておられた。牧水の流れを汲む氏の主宰で、「燎原」なる地方短歌誌が出ていた事は、知っている人も多い事と思う。(私は本誌第三十六号でいささかこれについて書いた) 荒木八雲氏が落着いた編集ぶりを成し、開沼貴代、佐々木茂季於、齋藤廣志、中村紫泉、多羅間きぬ子、などの顔が見える。当時の地方誌としては、体裁は兎も角、内容は大へん勝れていたと思う。

私はその前々年、隣村に当るセレージア植民地に、生れて初めての自分の土地に入植して、新興作物の棉作にいそしん

でいた。焼山の灰によごれ、馴れないマッシャードを振りおろしてはあえぎ、フェリーダ・ブラポに悩まされ乍ら、くたくに疲れたものだった。だが私は未だ若かった。張切った旺盛な気分で別に背痛も感じなかった。そして一年経た頃、私はふとした事から長女を失った。途端に私は悲歎のどん底につき落された。その時私は拭うべくもないこの悲しみの中で、短歌という形式で自らを慰め得る事を知った。それが私の短歌病？に取り付かれるそもそもの第一歩だった。（入植以前、今井白鴎先生から短歌の手ほどきは受けていたが、真剣に取り組まなかった）私が初めて聖報歌壇に投稿した子を失った時の歌が、池同重二に取り上げられて、えらくほめられた事があった。

指導者も参者書も無かった頃であったが、私はがむしゃらで三十一文字の中に美しい語感の言葉を選んで填め込んだ。それをどしどし聖報に投稿したものだった。

聖報が出した伯国初の歌集「移り来て」は、当時の歌を再選したものがのっている。これが十二年の八月に発行されている。葉木八雲氏が隣村に私がいるという事を知られたのは、この「移り来て」を見てからである。（氏は早くから投稿者だった）そして私は氏からの「意外に近い所に意外の歌人を得てうれしい」という手紙の中で、「燎原」への投稿を是非にとすすめられた。

八雲しらと隣村に住んでいたとはいえ可成りの距離もあ

り、入植早々の多忙にまぎれており、私はまだ青杜夫生や氏とも面識を持っていなかった。たまたま「燎原」第二号が届けられた。同封で、「近々青杜先生が聖市の教普会に転任される事に成った。僕一人では心細い。「燎原」を続刊したいのは山々だがどうも廃刊になるでしょう」という旨を伝えられた。そして、「或いはという事もあるし、次号への投稿をお願いする」と書き添えてあり、甚だ残念に堪えないというような感じを受けたものだった。

明けて十三年十月、「椰子樹」は「生れる可くして生れ出たもの」だと渓舟氏が云われたように、堂々とその産声を上げた。青杜先生の上聖、菊治先生の近郊移転などが、大きな機運を作ったものと思われる。「燎原」の廃刊と、「椰子樹」の創刊は、何か運命的な繋りを持っていたような気がする。私は更のて「椰子樹」創刊号をひもといて見た。十月集(二)に西田季子さんへ当時横地姓)のと並んで私の歌が四首のっている。その外に聖報歌壇八月抄として三首出ている。私は今その歌を見るにつけて、常時の生活環境がありありと浮かんで来て、何か懐しさが胸にこみ上げて来てならない。あれから約二十年という長い時間がたって、私は四十三才に成った。当時の私の歌から見て、現今の傾向はぐっと変わったが、果してどれだけの進歩を示しているのであろうか。

我はこの文章を書き乍ら、ふと百号記念号の事まで考える。順調に発刊されるとして後十年。私もその頃には、自分の言葉

で自分の歌が、自由に作れるようになりたいものだ。後十年たてば、私は五十三才になる……。いささか表題よりずれて私は余りにも自分の事を書き過ぎたようであるが、皆私に関わる事でもあり、外に書きようがなかった。

物故歌人作品集

岩波　菊治

暁の強き風吹く低空を飛行機は過ぐおほに揺れつつ

蒲沼に棲みつく亀が折々に赤渋水を掻き乱しつつ

この丘の裾引くところ朝なさな霧は沈めり湖の如くに

蒲の根に一ところ澄める水ありて群るるうろくずは動くともなし

トマテ売りてゆたかにならば蝕ひし歯をぞ治さむ我も吾妻も

アララギの中にしありて疑はず廿年ちかく歌よみて来ぬ

おしなべて穂草枯れしく岡の上に欠けたる昼の月昇り初む

葉が落ちて日光とほれるビリの木の直なる幹は梧桐に似つ

睡蓮の浮葉にそそぐ霧雨の折々にしてあらき音たつ

雑草を分けてそこばくの蕎麦刈りぬ二三度は蕎麦を打つに足るべし

あら草と牧の草とが斑なし枯れゆく岡に射す夕あかり

才能を頼むにあらずこつこつと歌詠みて我や二十年となりぬ

夕べ空曇りて暗し丘の上に光放てる航空標識燈

キロ十一ミルの値は言はず塩鱈を焼けば思ほゆ放里信濃を

いづこへも賀状は出さずひたむきに雨季のトマトを作るとき

ほふ

石山の山ふところは黍植えて既に穂に出づ丈低くして

二百俵の米取りしちふ畠にはカッピンフィーノ再びはびこる

浅川を遡りゆく獺ありて濁れる水は暫く澄まず

よそ行くと薄く化粧へる古妻が今日はいたくも若やぎて見ゆ

遠国に住めば術なしアララギが不着のこともしばしばなりき

小学校の皆勤賞に頂きし言海は三十とせ近く今も離さず

五十ミルの古着の服を恥ずるなく身にまとひつつ三とせ過ぐ
し

我が歌集がアララギの一冊となり世に出でむこそ今の願ひぞ

赤彦先生の教したしく蒙りしわが身の幸は一代おもはむ

ボルドー液に荒れし我が手の滑らかになりしを見れば病みて
久しき

二三枚選歌を為せぼ既に疲れ悲しきまでに根気失せたり

澄み徹る浅井の水に幾片の桃の花びら散りて浮べる

度の弱き妻の老眼鏡を時折は我もかけてぞ細かき書読む

茶畠に植えたる柿は稚くしてその幾本が映ゆるもみじ葉

桃の出荷また紙袋張りと幾夜さか夜業つづけて稍疲れぬる

さわやかに朝吹き渡る風のむた降るがに落つる桃の病葉

ソロモン島に爆死せしとふ弟のことも時隔りて実感に遠し

海面もビルも斜に傾きてわが視野に入る旋回する機上より

波の秀の白きも既に見え難き昏れゆく海の上を飛びゆく

翼端が時にゆるやかに上下する薄明の如き雲の中を飛ぶ

汐引きし渚に流れ入る川の清らかにして海より冷たし

分封の蜜蜂が群れて飛びすぎぬ桃間引く吾の頭の上を

眼にたちて肉づく吾を喜べど日々の注射代も馬鹿にならぬ

病あとの身をいたはりて居る日々よ今日は玉葱二連ほど編む

十年の後を頼みて五種類のオリベイラの苗十五本植う

切花となして売りたるえぞ菊の遅れ咲きたるは種子に採るべし

リオ・グランデより来つるカテテの白米に混る草の実は稗の如しも

坂根　嵯峨

今日の中に何か言ひたき人ひとり丘へ入る陽の眞向ひに立つ

波なしてひろごる丘陵の連亘の夕煙る上に赤き陽浮ぶ

美々しくもすこし狭霧ふ落日は緋衣着けし聖像にか似る

黄昏れし野の草踏めば大地深く微かに遠きものの声聞ゆ

図らずも春夏分かぬ一とせを裏半球に過しけるかな

万人の飲む珈琲を焼き棄つる不思議の国に来てぞ住みける

新しき野の国明くる朝ぞらの大気を吸へば老いらくもなし

窓に見ゆる朝の色濃き庭の樹に来鳴く小鳥の絶えざるが嬉し

独り居て書籍置き換え並べ見るわが世の中はさびしけどよし

天つ日に輝く国の御民守る任かしこしと西し東す

咲き初めし庭の緋合歓も青空の曇れば冷えて花植ゑずけり

裏庭に白百合咲けり金網の鶏小屋あるは少しいぶせき

植込みの中に見つけし小鳥の巣卵六つあり葉を載せて去る

枝に鳴く小鳥探すと朝空に望遠鏡を向けて笑はる

わが思ひはてなきごとし西の方大アンデスへつづく高原

チエテ川奥地へ流れラプラタの海に入るほどながきわが旅

総領事として支那へ帰らむ斯く思ひ待つ中にあなや公使となりぬ

総領事坂根準三此の名刺十年手馴れつ裂くに忍びつ

この職のわが本性に合ふごとく人の言ふまで、永く勤めけり

此の邦に来ては一向何事も第二世日本人の為ぞと励みぬ

月の夜の廣野さびし野将これも復眺め得じと汽車に落涙す

悠然とアンデスの山望みつつ暫くの間身体を良くせむ

樋田　美沙子

肌にしむ潮のつめたさを意識しつつ足にまつはる波を見てをり

真昼を憩ふサンビセンテの岩かげに忘勿草はここだ咲きをり

丈低く繁れる椰子の葉がくれにあまた黄蜂は巣をつくり居り

今更に亡き妹のこと言はねどもうから集へば寂しげの老母

良き夫に事へるは女なべてもの幸なりと宣らず我が母

有閑マダムと人は言ひたり病持ちつつ三人の子等と家守る我を

心臓弁膜症は不治なりと医師は言ひにけり吾か現身の心昂ぶる

かよはなる吾が体力をひたたのむ病む日は寂し身も細るがに

わびしさを夫にも言はすにこやりゐて本を閉ぢ眼を閉ぢ涙落ち来ね

浜木棉の新葉は伸びてつやつやし外葉の面は埃たまれり

わずらはしき世相を言ひつ吾が夫はこの頃教師退きたしと言ふ

こだはりを持ちて縫へばか仕立物易きところさへよくまちがひぬ

荒木　八雲

夜更けて明日の豆など鍋に煮つ耳をすませば鹿のなくなり

妻の手にすがりてさへも安からぬ歩みあぶなき吾となりけり

春の畑のどかに妻の種蒔くを吾れ病みこやり窓ゆ見て居り

咲き初めし花の頃よりわは病みマンガはうれぬ枝もとををに

挿木してほどなく病みし吾なれやあえかにバラの花咲きてけり

めんどりの鳴きし不吉がははそはのはかなき命を告げにたらしも

長病みのわれはも遂に死なずしてみとりつかれて母死にましぬ

いまはとてとればかつぎの下にしてうら安けくぞ目は閉ぢてます

今本　義美

言ひがたき悩を持ちてあり経つつ我が明暮は狂ふに似たり

この生活に疑念はなしと思ひしは心たりし日の感傷にてありし

ある時の心已れを誇りつつ思ひ上りも言も言ひたり

夜に入りて然えつづく野火は折からのふきしく風に火の粉あ

げたり

この庭の木槿しらじら咲き残りふく風寒きくもり日続く

うすぐらき地下十五米に立ち居つつ空を仰げば空のふかさよ

炭酸瓦斯の湧き来る音か雑音の四方より起る地下深くして

一歩一歩吸こまるる如し畏縮する心はげまし綱つたひ下る

おちかかる細き月かげうちけぶり野にひとしきりふくろふ鳴くも

棚雲に日に入る頃や家鳩は群なして飛べり丘はろばろと

山本　孤愁

カチカチと氷をくだく錐の音病める頭にひびく佗しさ

可憐しき教子の音信を読みつつ速に我が癒えむとおもふ

入浴せざる我が痩体より発散する甚しき悪臭に耐へ難きかな

歌も日記も書く気にならす思索も勿論出来ず懶きこの頃

索莫なる日のつづくなり病床録も書けずに既に幾日経にけむ

何の欲望も持たざる現在のわれながら唯ひとつひたに歌書欲しを思ふ

華麗なる絵を貼りておもふ陰惨なるわが病室にはおよそ相應しからぬを

陰鬱なる我が部屋隅に発見けたるくさかげらふの卵なりけり

たえまなく大空に離合集散する雲をし見つつ臥しをり今日も

数種の昆虫図鑑に対照しこころたらへり熱低き今朝は

無限に散らばる夜の星を仰ぎつつかなしきことはしばし忘れむ

レコードのシンフォニーの聞ゆなり黄道光帯を観つ佇ちをれば

大き望もちて来しものを斯かる病にたふれむと誰が思ひ設けし

日哺潮熱のさし来る頃か読みさしのアララギを置きて眼を閉ぢにけり

別に苦しむと言ふにあらねどぶつぶつと痰が胸中に鳴るは淋しゑ

咳きに咳きてつひに蒲団に俯臥せばあはれ垢しみしふとんのにほふ

行くところまで行きつきたりと感じつつ薄暗き施療病室の中を見まはす

長友　安徳

思ひ出でて行李の底なる一束の古き手紙読まむこの雨の日に

医師の薬も効能あらずリョウマチスはつひに持病となりにけるかも

作歌年数の長きは言はれつづまりは能なき歌人と哀れ自嘲す

斯くの如資本と苦労のかかるトマテせめて百ミル位には売り度し

今日の午後豌豆二列くくり終へ既に冷えゆく夕暮となる

六十俵玉葱出荷し疲れたり今宵は娘等に肩をもまする

腹這ひし吾に灸はすえらるる線香の煙が匂ふ夜の部屋

常弱き子が居て妻が嘆き言ふ「わかもとでも買って呑ませてみたら」

病みてより心は細くある時は不治をかこちて泣く母の前

幾月が病苦に耐えて生き来せば死ぬる覚悟も出でて安けし

丈合はぬ長き白衣を吾は着て朝々散歩す長き廊下を

きかぬ子の頭を一つ軽くたたき放課間近の授業つづくる

七人の子等をかかへて失職せし嘆きは吾より妻が大きく

明日の授業休み告ぐれば四五人の腕白児童が歓声あぐる

教員の吾の未来に何がある思ひわびしみ坂道下る

武田　公平

熱無き日の空想事は熱高き日の懊悩に砂樓の如く崩ゆ

足乳根の母眠る丘に我を埋めむ熱高き日は斯く願ひをり

小工場の弱点を指摘し女工等抜き行ける大工場の支配人はも

細粉が煙の如く立ちこめて眼鏡くもれば指もてぬぐふ

草焼くる匂ひ漂ふ旅の町にてとぼしき灯つき初めにけり

打ち撓み白くくだくる波の穂の際限もなき海の律動

海に来て感傷も無しと言ひたりしは後にし想へば誤りなりき

海に向ひて思ひきり投げし石がつい眼の前に落ちて音立つ

海風の吹きつくるところ生ひ立ちし木のことごとく陸に傾く

渺茫と潤ごる海と空に向ひしみ来るこの寂しさはや

或る年は妻子等率ゐ海に来むかかる小さき願ひも難し

うめきつつ眠る身重の妻と臥す夜更激しく撃たるる想ひ

あれあそこに花火が散るよといふ妻よ或る夜ひそかに窓に寄り添ふ

友が来て日本語ばかりで話をする傍に妻は傀儡の如し

我死なば日本人に関りなく生きむ妻子を想ひみにけり

遠つ祖先ゆ享け継ぎ来りしならはしも我の代となり絶え果てにけり

飲酒癖は吾が父母系にありしと思ふ想ひみれば皆短命なりき

街角を曲りし時に吹きつける砂混りの風に背を向けて佇つ

赤色の十六夜の月昇り初む怖れといはばいふべき想ひに

弁当がらを下げて通れば野良犬が後からつき来る夜半の舗道を

揚げ油の臭気が我が体臭となり行くと妻が言ひて笑へり

ほとほとに疲れて帰る夜の町に下げ看板が風に鳴りゐる

首筋を掌もてぬぐへばパンの粉よれよれとなりて原稿紙に落ちる

かげろふは燈に舞ひゐしが落ち来たり白き卓布にたよたよとゐる

昨夜いたく我を苦しめし想念すら虚しと想ふ朝光の中

光箭の区劃の中を浮遊する微塵の動き見つつ飽かなく

草の絮一つ入り来て流れつつ微塵のの中に白く輝く

臥してみる窓の外には三本の萱の穂がゆれをりて碧い空ばかり

伊藤　次郎

浅池に伸立つ蒲の大方を刈りとりて干す庭一面に

挿木して四月を経たね紫陽花は土すれずれに花もちにけり

枯々の桃の老木いたましく絡まり繁りぬかささぎの豆は

かたばみの花うつろひしこの原の昼の静寂に鳴く蝉かも

如何に言ひて金借りむかと惑ひつつ霧雨の中にバス待ちてたつ

へたさへにいばら持てればジュアの実の赤く熟れしを啄む鳥もなし

野にジュアの花白き頃郭公は鳴きつぎしかも裏の林に

星光のもゆるこの夜は山脈の向うの海の鳴るが聞ゆも

減水期のチエテの高き崩岸に傾きて芽ぶく濯木のひともと

顧る我が来生は暗けども光をふふむ思ひ出ひとつ

異端の徒と見放さるる故うべならひて自ら間隔をとりて座につく

吃りつつ答ふる我を見る眼には早やありありと浮ぶ軽蔑

鳩時計の鳩が互声鳴く聞けば楽しき今日の会合終る

バスを待つ列の中なる老婦人に何か言ひ接吻をして去る少女

遠き記憶の日の如くにも靄はれし冬の峡に鳴く山鳩よ

仄かなる虹はしばらく立ちしかど朝霧はまた渦巻き流るる

中井　小鴨

酒瓶の栓さし抜くやちちのみの位牌に捧ぐその一つぎを

アゼイテの峯に雲居の欝しくも会ふをかたみと歎きつるかも

声高に呼べど聾の老妻は甲斐々々しくもぼろ衣を乾す

褌を処かまはず日に乾すは心なきわざと思へよ妻よ

岡の端の青草の上を白々と輝よひ降れる夕暮の雨

太芽萌ゆる蘭の一株斯く植ゑて軒に吊すも花を見むがため

自動車の轍の跡の数多なる濱の砂踏み人に隨き行く

汐騒の狂ひ奔れる磯前を波に腹すり渡る海鴨

角ぐめる乏しき蘭の若き芽を小蟻は日々を絶えず虐ぐ

釣り呆けし吾が後事より河の面に石投げ醒すどこの童ぞ

瀧澤　正

時をりの風になびきて光れども萌黄若葉は音たてぬかも

おぼつかぬ足ふみしめて立つ我によりそふ妻と顔を見あはす

いたはりのつつよりそひ歩む吾が妻よいつの日癒えてかへりうべしや

頭のしびれもの憂き日々を病みはててただに臥れる夢見る如くに

たまゆらに耳鳴りうすらぐ時ありてさはに聞え来る風騒の音

病みつかれ頭ふりふり起き出でし狭庭あかるく咲く紅さうび

あはれ吾がねはんの像とひねもすを病床にゐて物を思はず

日毎吾が衰へゆけどもこれの世に病いやさむてだてはあらす

物言へば声ふるふべし妻とゐて衰へはてし身をば嘆かふ

二た年を吾が病みをれば子を守りて生計の業に妻やつれたり

つきつめて見へばはかなきものながら現身生きてあるは愛しき

積田　三郎

人来れば吾より先に子等はみな教科書を閉ぢておののけるあはれ

巡回の日本語教師つつがなく今日も終れり有難きかな

村岡　マサ子

はじめて万葉集をば買ひしかば夜更くる事も知らで読みにき

骨粉のサツコもて服を作るにも慣れつつ今は佗しと思はず

渡邊　春洋

ほほけ立つジャラグワイの原を下り来て疎き樹立に夜風とよもす

馬糧買ふ銭も乏しくこの春は十頭の馬いたく痩せにし

大花　きみの

いささかの小遺子等に与へむと茶の芽つむなり昨日も今日も

馬使ふ術にもなれて農婦吾十余年此処に住みぬる

仙田　美根子

我のまだ幼き頃の椰子樹誌を今宵もひとり読みふけり居り

谷一つへだてて向かふ山腹のラミー畑に風渡る見ゆ

村上　啓園

亡き妻も且て遊びしこの磯に忘れ形見の手をひきて佇つ

風出でて釣人去りし湖の岸べをさして寄る鴨の群

宮本　三春

牛購ひてカーロを買ひて残る金あるやなしやと来る年おもふ

果実蔬菜の栽培よりも養鶏が楽で儲かると話し合ふ人々

病み臥してあれば気弱くなり来り涙もろくも物読みて泣く

花園　三郎

日傘さし處女の三人午後の日を療舎の路に試歩をたのしむ

雨音の繁きに目覚めて夜の床に肋骨切断手術思ひゐる

北村　梨月

注射器をパスタに入れてもちあるく集金人と我を言ひ居らむ

たのみなき注射器を我はととのへてくびれし尻にビタミーナ打つ

大月　證亮

送電の柱の下に子供等は虫を除けつつ時間を忘るる

雨もりの修繕を終へし家主より家賃値上げの通告を受く

川口　久藏

荒廃地年に擴がりこのあたり乾季到れば野火を気遣ふ

小雀らはしきりに鳴きて流し場に水を呑みつつ怖ることなし

眞田　喜之助

独活なます賞でつつ食せる老父は故郷の香りがするといふなり

透かし見る川面は暗く友の打つ網音思はぬ方よりきこゆ

恩村　實記

吾が病癒ゆるを信じ嫁ぐ日の来るをひそかに待つと言ふ君

門川の濁る水面を流れ来し芥かたよる水草のもと

母そはのはの手縫ひの寝巻着て今宵ば早く床に親しむ

吾が病癒えてもその後にどれだけの事が社会に貢献できるか

声あげて泣きたく思ふ感情を耐えて夕べの巷歩みつ

中田　武男

ヤッホーと歌ひあひつつ高原の日和よき日に松の実拾ふ

痰壷をわが口元に押しあてて友よ吐く血を受けてくるるか

空洞にくろすみて溜る悪しき血と決めて吐きだすその黒き血を

恋を知らぬひとりのわれは長病みて恋人の日に血を吐きて居り

肺病に勝ちて生きむと思ふ日よ血沈速度は百を下りぬ

姉止が送り給ひしシャツを着て再び散歩をする日のありや

正木　思水

気づかひて取りし胸水は紅に目盛りの瓶の底にしづまる

焚きたての飯の熱気にも永病にただれし咽喉はむせて咳入る

亡き母の声さながらに妹が長距離電話で話すその声

簿絹の上よりなづる感じありむくめる顔を朝洗へば

朝々にむくみ増し来る双足をひきずり歩く冬ハエに似つ

移されし七号室は没りつ日が窓より入りて壁照らすなり

白き腹返へし飛び交ふつばくらを見つつし午後の検温をする

物故歌人　略歴

岩波　菊治

○明治三十一年（八九八）十二月四日　長野県諏訪市に生まる。

○大正七年（一九一八）、「アララギ」に入会、島木赤彦に師事す。

○同十三年（一九二四）十一月、宮本とめと結婚す。

○同十四年（一九二五）九月渡伯、ノロエステ線ルツサンビーラ駅第一アリアンサに入植す。

○同地青年会の運動、修養各部の指導者となり、アリアンサ短歌会を設立す。

○同二年（一九二七）、「アララギ」の同人となる。俳人木村圭石らと合同誌「おかぼ」を発刊、掬治と号して俳句もなす。また日伯新聞歌壇の選者となり、ブラジル短歌の開拓につとむ。

○同十三年（一九三八）十月、創刊された「椰子樹」の選者となり後進の指導にあたる。病後の保養のためカンピーナスに在住中なり。

○同十八年（一九四三）、戦時中、スザノに移転、モジ林泉短歌会に参加す。

○同十九年（一九四四）、モジに定住して果樹と養鶏の経営をはじむ。

○同二十二年（一九四七）、終戦後、復刊「椰子樹」と、日伯新聞の後身。パウリスタ新聞歌壇に、再び選音となる。
○同二十五年（一九四九）二月十日、五十回誕辰を祝され、パウリスタ新聞社主催にて、第一回全伯短歌大会が盛大に開催される。
○短歌熱上昇につれて各地方に短歌会おこり、その大会には卒先して出席、大いに向上をはかる。
○同二十七年（一九五二）十一月二十四日、急性胃潰瘍にかかり、桃蔭山房にて終焉す。行年五十五才なり。
○同二十九年（一九五四）九月十一日、イビラプエラ日本館庭園に、故人の歌碑が建立され、その除幕式が関係者列席のもとに挙行さる。

坂根　嵯峨

○本名準三　京都府出身
○明治四十三年（一九一〇）、東京商科大学に人学、一級下に椎木文也あり。
○大正四年（一九一五）、本科を経て専攻部を卒業、外務官となる。
○昭和十二年（一九三七）十一月、ブラジル総領事として着任す。
○司政のかたわら、他に花潮群濤、櫻井薫、水鳥十三子のペンネームにて、各新聞紙上にたくましい作歌力を不す。

○同十三年（一九三八）、「椰子樹」の創刊を見、以後、物心両面に多大の援助を尽す。
○同十五年（一九四〇）四月、コロンビア駐劄公使に栄転す。
○同十六年（一九四一）、日米開戦に先だち帰国す。
○戦時中に死去せるも日時不明。

樋田　美沙子

○明治四十年（一九〇七）三月十五日、岡山県美津群新山村に生まる。
○舊性光田　本名操。
○大正十五年（一九二六）七月、渡伯してノロエステ線ルッサンビーラ駅第一アリアンサに入植す。
○昭和九年（一九三四）、夫の徳重（陽荘）暁星学園に奉職、一家をあげてサンパウロに転住す。
○同十六年（一九四一）十二月四日、宿痾の心臓病重り逝く。行年三十四才。

荒木　八雲

○本名祐吉、哀果とも号す。
○明治三十八年（一九〇五）五月十四日鳥取県日野多田村に生まる。
○昭和四年（一九二九）、渡伯。
○同十三年（一九三八）、マリリア・アンデス植民地にて、短

歌誌「燎原」を発行編集す。
○同二十五年（一九五〇）五月二十八日急性腎臓炎にて死夫。行年四十五才。

山本　孤愁

○本名瀧雄、大正四年（一九一六）、静岡県に生まる。
○昭和八年（一九三二）、実兄の家族とともに渡伯、マリリア管内の某耕地に就働す。
○農を棄てて日語教師となりしが、肺を冒され保養生活に入る。
○同十四年（一九三八）、マリリアにて公認教師試験に合格す。
○同十五年（一九四〇）、ガルサに移る。
○同十六年（一九四一）末、病勢悪化、上聖して某病院に入院す。
○死去年月日不明。

長友　安徳

○大正五年（一九一六）一月三日、宮崎県に生まる。
○昭和二十三年（一九四八）、アグードスよりスザノに転住す。
○同二十九年（一九五四）、心臓病にて保養す。小康を得てサン・ミゲールにてキタンダ業を始む。

○同三十年（一九五五）、病気再発、病院生活に入る。退院後、ピエダーデへ日語教師として赴任す。
○同三十三年（一九五六）、学校経営困難にて閉鎖、ピラール・ド・スールの日本語学校に転職す。
○同年九月、過労のため病勢改まり、両親の元へ帰宅せしが、同四日年前十一時死去。行年四十一才。

伊藤　次郎

○大正十三年（一九二四）生まる。
○昭和十九年（一九四四）ごろ、パウリスタ線ガルサより、モジのビリチーバに転住す。生来の病弱にて過労に耐えず。常に保養生活を続く。
○同二十一年（一九四六）六月、厭世自殺を遂げんとせしも止む。
○同二十五年（一九五〇）九月十六日、心臓病にて逝く、行年二十七才なり。

今本　義美

○金鏡兒と号す。マリリアに在住せし以外、故人については不明なり。

中井　小鴨

○明治七年（一八七四）十月二十二日、鳥取県に生まる。本

名喜一。
○大正七年（一九一八）、渡伯。
○昭和二十四年（一九四九）末、カタンヅーバより南聖イタリリーに転住。吉本青夢と南聖短歌会を生む。
○同二十六年（一九五一）、パラナ州サント・イナショに移る。
○同二十八年（一九五三）七月三十日、老衰のため逝去す。行年八十才。
○未亡人すみれ、長男夫妻の鉄夫、壽美代、次男夫妻の廉二、益代（芙蓉）、ともに歌人として名あり。

武田　公平
○福岡県企救郡松ヶ江村に生まる。
○昭和七年（一九三二）六月、親族生野一家と着伯、ゴヤス線グワラニー耕地に配耕さる。
○間もなく転々と放浪生活に入る。相思の女性との恋愛ならず、カンポスに療養事中一伯人女性と結婚す。
○カフェランジアに定任してより、製糸工場員、新聞、肥料販売の外交員、パステス屋などと職を換う。
○昭和二十六年（一九五一）八月三日、肺結核再発して逝く。行年三十八才。

滝沢正
○昭和十五年（一九四〇）ごろ、ブラジル時報社の児童雑誌

「子供の園」編集部にあり。美術学校に通ふ。
○戦時中結婚、商事業にたずをわる。
○同二十一年（一九四六）、かつ血を見て自宅にて闘病す。
○岡二十二年（ 九四七）一月、病状進み、サン・ジョゼ・ドス・カンポスのサナトリオに病褥を移す。
○同二十三年（一九四八）九月六日、同サナトリオにて逝去。行年三十四才。

大花　きみの
○長野県出身、「潮音」に関係す。
○渡伯後、南聖イグアツペのセツテ・バラスにあり。
○死去年月日つまびらかならず。

積田　三郎
○多美津生と号す。目語数師、新聞社員の経歴以外不明

村岡　マサ子
○本籍舊領樺太、志津子ともいう。
○昭和七年（一九三二）渡伯、パラナ州モレッテスに在住せり。
○同二十年（一九四五）三月、強度の神経衰弱に陥り服毒自殺を遂ぐ。

渡邊　春洋

○大正二年（一九一三）、福島県田村郡ノ芦澤村に生まる。本名昂。

○昭和十六年（一九四一）より、マリリアの第二昭和植民地にあり。

○同十七年（一九四二）十月二十五日死亡す。行年二十九才なり。

仙田　美根子

○仙田ます子の次女として生まる。

○昭和二十五年（一九五〇）、パラナ州コルネリオ。プロコピオにて逝く。

宮本　三春

○本名敏雄、中央線ピンダモニヤンガーバに在住。

○昭和二十六年（一九五一）、脳溢血にて死去す。

花園　三郎

○大正元年（一九一二）五月十日、鹿児島県に生まる。

○昭和二十一年（一九四六）六日、肺結核にてカンポスのＦ・Ｘ療養所入所。

○同二十五年（一九五〇）八月一日、死亡す。

北村　梨月

○昭和三十年（一九五五）一月十一日、カンポスＦ・Ｘ療養所にて逝く。

大月　澄亮

○明治二十五年（一八八二）五月十七日大阪に生まる。
○大正七年（一九一八）、静岡県の其日蓮寺の住職となる。
○渡伯してパラナ州アサイにあり。
○昭和三十二年（一九五七）入寂。六十五才なり。

村上　啓園

○鳥取県出身。本名不詳。
○昭和二十六年（一九五一）、リベイロン・ピーレスにて死去。

川口　久藏

○明治十七年（一八八四）六月十五日、北海道に生まる。
○ノロエステ線ルツサンビーラ駅ベラ・フロレスタにて農業を経営。
○昭和三十二年（一九五七）、イタケーラにて他界す。

眞田　喜之作

○昭和二十八年（一九五三）十二月三十一日、アサイにて死

去す。四十二才。

恩村　實紀

○昭和二十一年（一九四六）ごろ、モジに在住せしことあり。
○同二十六年（一九五一）、ポンペイアより療養のためカンポスに移る。ペンネームを守屋みのると改む。
○同二十八年（一九五三）一月二十三日グワルリョスにて逝く。

中田　武男

○大正十三年（一九二四）三月三日、北海道に生まる。
○幼く両親と渡伯、レヂストロにて教育を受く。他郷と号して俳句をなす。
○昭和二十三年（一九四八）末より七年間、カンポスF・X療養所にあり。
○同三十年（一九五五）十月三十一日、狭心症のためボン・スセッソの自宅にて逝く。行年三十一才なり。

正木　思永

○大正五年（一九一六）六月十日、高知県に生まる。本名良武。
○昭和八年（一九三三）、渡伯。
○同二十年（一九四五）、カンポスS・X療養所に入る。

○同三十一年（一九五六）、死去す。

同人作品抄　2

椎木　文也

雲海の果ての黒雲乱れたり大西洋に雨降らしゐむ

龍舌蘭の高茎の先に陽は残り大洋の波音しづかになりぬ

邦人の死にわがこころうづまりて南十字星傾きそめぬ

サンパウロの書店にいつよりありにげむ菜根譚を我は見つけぬ

日本より着きし巨船が朝暑き埠頭に深き影つくりたり

わが妻が送りて呉れし仙蘇丸服みて夜明を待ちゐたりけり

妻子らを帰して既に三年経ぬ水平線に雲おぼろなり

阿部　青杜

渓川の水音さびしも逼ひ上る汽車のとよみにまぐれつつきこゆ

みづからの至らぬ遠きなけかひをしたなげきつつみ歌よみ居り

蜆汁しじに食べたく思ひ居り病めばはかなきねがひなるかも

葉を敷きて藤の小籠に盛りてあり汽車の窓より葡萄を買ふも

棉畑の夕色ふかきひそけさや吾がする呼吸の音にきこえつつ

渡部　南仙子

エスケーロ灯して入れば鍾乳石白くかげりて蝙蝠飛びたつ

独房の夜寒きびしき立ちしままに煙草ふかしつつ人を想へり

石井　繁美

青き船波止場にかかり山の影うつして凪げる朝の海かも

阿部　素童

一筋に廣野にとほれる埴土道はさみしきかもよ空に消えゐて

三宝　映之輔

昏れなづむ噴井の水の銀ねづに羽黒き禽の濡れてゐにけり

富吉　好人

生活の貧しさに日毎愚痴をいふみごもる妻にわれは言なし

別れ来し女の夢に目覚めつつうつつに聞くや妻の寝息を

友と二人強か飲みし夜の更けに目覚めて食ふ茶漬の飯を

秋野　　愁

黄に塗りし郊外電車の停れるが半ば開きし窓に写りぬ

世渡りの途に暗しとひたすらに思ふときあり机に向きて

石截りの鐘音遠くきこえ来ぬ山腹白く陽にかがやきて

妻と子の写真持ち来しこの旅を永の別れの如くおもひつ

三浦　　茅里

つぶら実の鈴なりのびはの木の下に兒の投げくるるを身がまへて待つ

濡るる程の雨にはあらず池の面に咲き静もれる睡蓮の花

須貝　さだめ

口唇に玉虫色の紅さしてけふも母をぼ恋ふ我が三十路

古びたるはとばの街はわびしけれ壁色あせしさかり場を行く

経済の足しにせまくと狭庭べに野菜を植ゑまた薬草を植う

樋田　陽荘

古さびし父の墓標に額づきてはるばる来しを告げて泣きたり

雲間より射す陽明るき丘の上アンテナ塔は天に迫れり

波沫　正夫

糸百合の花は一夜の花にして見れどあかぬかもその細き花を

支那桐の赤さ芽立ちをいとほしみ廻りの草を吾が除りてやる

眼醒めて聴く瓦をたたく雨の音妻は起きゐて髪すきて居り

黍小屋に巣くふねずみの時折は井戸辺に出でて水を飲むらし

萌え初めし芝生が中に聖州より連れ来し山羊が仔を生みにけり

病院の永き一日をもて余す妻に届けむ本購ひぬ

中須　夏山

繰棉工場の水のタンクの輝きて幾つも高きマリリアに入る

水銀柱九十度のまま昏れむとする部屋に真白き覇王樹の花

小田切　劒

墓原にたむろす雲の朝焼けて移りしづかに落ちゆかんとす

国を挙げて戦しけるが一億の力つきしと聞けば泣かるる

澁川　不二夫

バロセーロ待つ間しばしを渚辺に小石拾ひつつ水音きき居り

霧にぬれ珈琲採取に出て行ける人等の中に教へ兒も見ゆ

沖田　春陽

棘もちし蘭の下葉に巣をはれる緋ぐも三つ四つ虫巻きてをり

ぜん息の病こそ哀れ夜半の冷え妻は寝がたく咳入りにける

晶山　充

時折りにしぐるる日なり西空に灰色ぐもの低く垂れつつ

狭霧降る探夜の街を酔ひたまふ師と連立ちて帰り来りぬ

続け打つ注射の反應見えずして義父の瞳の今はひろがる

栗色の髪のよろしさ白珠の飾は耳朶にさゆれにつつ

赤濁る大河にそそぐ流れありそそげるところやや澄みにつつ

もう金は再び借りるまじ支拂の日のべをたのむこの卑屈感

牛窪　せいし

酔さめて踏む街路樹の影さむしひとり別れて去なむとするに

しののめの小床に臥してかつかつと欲りするものか冷たき水を

堀立の小屋のひと間のおきふしやつつがはあらで若き二人あり

主張なき総会なりき我が描く似顔はいつか便箋紙に充つ

金子　秀雄

母国より持ち来し蚊帳の端切りて作れる籠に螢光りをり

遠山　瑞水

くすしくも土より出でてかくばかり真白き棉となりにけるかも

石井　衣子

うちつどひ祝詞かはす公使館の露台を朝の風吹き渡る

つつましくこまかき花を盛りあげてライラックにほふ陰影しづかなり

神経の張りにほとほと堪えつ半球の彼方より来る娘の声を待つ

戦苦知らで生きは生きつれ相見れば悲しき顔となりにけるかも

浅田　今日志

午後にしてけだるき身をば横たへつ古き雑誌のぬき読みに倦む

一節の暗誦のごとく聴きにけり社交辞令の巧みなるをば

間接には我等も無形の戦災をかうむりしなり強ひて言ふならば

わだつみの呼吸の如く砂濱にさし引く潮のたゆむことなき

古澤　典穂

合歓の花いたく散りける舗石に雨に濡れつつ電車待ちけり

八巻　培夫

幾山は青木ながらに燃えさかり炎すさまじき滅びのとよみ

禽獣を屠るが如く秀しが殺さるる時を恃めと言ふか

水平線ゆく汽船がいつまでも見えて居り映画にある別離の場面の如く

奥田　葉吉

ゐねむれる客をばかるく呼び起し検礼し行けりランプを持ちて

心おもたく出勤の心わかぬ朝病気と電話して子等と遊べり

踏切りの上るたちまちなだれ行く人ごみぬちに銭落ちる音

小島　正徳

此処にして行くへも来しへも天雲の下に遙けし州境峠

枯草のした求むればここだくも角ぐめるかもうらじろ青芽

橙色に淡くよごれし灯がともる海霧深き街を歩めり

つばくらが首をかしげて並んでゐる電線の向ふは秋碧い穹

池田　喜城

歎きつつこもりさびしむ島の宿遠白みゆく川波の色

寒々と風車のめぐる光さへやさびしと見つつわれは行きたり

冬の陽のしづもり深しあるかなき微塵の舞ひよ光をふくむ

荒れすぎし朝の河原の砂の上むくろつめたくおかれし子はも

小林　鶉尾

精米機の律動に籾流れ行きて出づるところ白きが目に沁む

子を思ひ妻逝きたるを悲しめど循環性ある金なきは嘆かず

山路　瞬一

シリア街に近き編集室に時折はシリアらしきレコードのひびく宵あり

うしろ姿

渡部　南仙子

真夏のサルト・グランデの瀧は、怒る様に冷たい飛沫を投げかけて来るばかりであった。O市から行を共にしていたH氏夫人の作ってくれたホットウイスキーの中のリモンは、押しても沈まなかった。巻きすしとサラダのサンドウィッチは、淡雪のように舌にとけて行った。

だから、もう総領事殿ではなく、まして歌人嵯峨でもない。一介の、眼鏡をかけた坂根さんが、H氏夫人を加えた四人の話に酔っては盃をなめるのであった。川原のまるい石を拾っては投げると、瀧つぼからの風は、ひやひやと、わたしたちの話を消すのであった。話している事柄は、何の変屈もないつまらない課題であったから、とぎれがちであった。別れねばならない別れの酒盃に、お互いがその事に触れたくな

く、ふっつりとある瞬間の静かさが、たまらない淋しさであった。酔うていて、語していて、お互いに同じ事を考えていた。

その夜も握りすしで飲んだのだが、私に短冊なんどを書いてくれる坂根さんは、眼鏡を何度をリンパしていた。夜汽車で帰る私を見送ってくれた駅の電燈には、澤山な灯蛾がとんでいた。また明日にでも会える人の様に手を握って別れたのだが、それっきりになってしまったのだ。

菩提樹の夕方の影は、是もやっぱり真夏であった。プルデンテの駅前の公園であった。胃潰瘍で十一キロも痩せてしまった私が、石の椅子に、菊治とたった二人で昏れているのであった。

南仙子と共に酌ままく遠来つるわがくやしさよ君飲めずして　　と彼は短冊に、先刻歌会の会場で私に書いてくれたのだった。ビールものめない私は、彼につぐばかりであった。

「なあ、南仙子死ぬなよな。死んじあ駄目だぞえ。お互いにな、いのちは大事にせんといけんで」。何度くりかえした彼の言葉たったか。二次会の唄う会場を、ぬけて来た二人の石椅子であった。語る事は歌の事ばかりであった。コロニアの歌の事ばかりであった。コロニアの将来の歌の事ばかりであった。二十年後の三十年後の、五十年後の、コロニアの歌

の事ばかりであった。菊治は、くしゃくしゃと本当に泣いていた。「だから生長きしなくちゃ」。と最後に結びの様に言った彼であった。

翌日の彼との別れは、とてもこころの残るものであった。彼の死はみんなをおどろかした。忌日にわざわざ、墓参してその歌会に行った私は、墓の盛土がぽっこりと、へしゃげているのを見て、菩提樹の下での彼の泣顔を思いだしたものであった。

それにしても、生き残る者の寂しさにくらべたら、死んで行く者は良いな、と近頃思う事がある。私には圭石、暁雪なんど俳人として忘れられない死があるが、死んで逝った人は皆美しいではないか。誰彼なしにそうではあるが、詩人は特に美しい死後のうしろ姿である。呼んでも呼んでも、こっちを向いてくれないうしろ姿である。

椰子樹記念号に寄せて

中江　克巳　　西田　季子　　安部　栄子

川原　比露思　開沼　貴代　　葛西　妙子

中江　克巳

その頃、私はミランドポリス駅奥の移住地事務所の一事務員として型通りの勤人と成っていた。既に樋田夫妻も聖市に去り、武本、住吉、相次いで村を出て岩波先生もモヂアナ線からカンピーナス郊外と歩いて居られた。「地平線」も或る頂点に突当り休刊体制に入っていた様に思う。奥地に住む青白き青年共は一様に日伯、時報、聖報と新聞歌壇に集り、それぞれ歌道を進んでいた矢先き、北巴から再出聖した武本兄から（昭和十二年九月十一日附）「今度岩波、坂根、阿部の諸氏を中心に伯国短歌雑誌刊行の議が起こり、当地平線同人はそのまま新歌誌の同人に成って貰う事になるので大兄も一枚加わる可し、凡て手配ずみ悪しからす……」と云った様な手紙が届いた。「一部には群濤如き股旅者を相手に発行も頼りないものとの世評もあるが…」とも附け加えてあった。その歌誌が五十号発行に至ったと云う一事の蔭に此の二十年に渉る間幾人かの努力が奉仕されて来たか、それが先ず想われる。

その常時、克巳という名の外に葉山幸子と云うネームで

天かける陽光しみみに照り透り此処奥津城の土乾き居り

冷えびえと空の眞洞の澄み透りしみみに冬の光とどきぬ

と云った作品を連続的に発表して、当時の時報選者徳尾渓舟氏に喰い下り、山住み者の寂しさをまぎらしていたが、折

返し武本兄から「最近ミランドポリス町在葉山幸子の名で出詠しているのは君であろう。変な真似は止めて正体を現せ、君以外にこれだけ詠みこなせる者は居ない筈だ。中央では目下文芸懇話会が何回か持たれて歌謡発行の議も進んでいる現在である。遊び事は止めて積極的に協力す可きだ。同人は誌友十人を集める義務あり」と、叱責された事もある。

その時以来、一つの歌誌にしても地方人と中央人の意気の相違といった様なもの、或いは一つのズレと云う様なものがある事を感じさせられて来た。推進したる者と引張られる者との相違であろう。

我が椰子樹も、そうした空気の中から生まれて今日に至る事に対する喜び以上に、今後を如何に持って行く可きかと云った開拓者に対する責任感の方が大である。百号記念号は如何に生まれるであろうか、その土台は現在の我々が築いておく可きである。それにしても二十年前に大きな熱意と、愛情を傾けた先進達が種々な都合から、段々と椰子樹から離れて行くと云った事は淋しい極みであり、伯国歌壇に取っても大きな損失である。

移民五十周年記念の年に当り、我が椰子樹五十号記念号を贈るという事も移住者として一つの感懐がある。以上椰子樹発刊前夜の自画像を以って同好諸氏の精進に敬意を表する次第である。

西田　季子

「風吹けば波に片寄る落葉あり陽ざしまばらな池の面に」この拙い歌は私にとっては貴重な思い出の歌である。バルゼン・グランデの山下亀一氏宅での歌会の折の作品である。

思えばあの歌会も十七年の昔になる。私は三十の声を聞いたばかりの女盛りであり、同行の武本氏、徳尾氏も選者という重々しい肩書きに似合わぬ紅顔の美青年であったはずだ。この二人の外に山下澄江氏、秋野愁氏などに紹介され、正式に椰子樹の誌友としての一歩をふみ出したのであった。

「あなたの御住所から近いバルゼン・グランデ歌会が催されます。よい機会ですから聖市歌人との顔合せのたつもりで御出席なさいませんか」という武本氏からの誘いの手紙が来なかったら、消極的で卑屈な私はいつまでも入会などとらなかったかも知れない。

考えてみれば、私の伯国生活から短歌を取り去ったら何が残ったであろうか。

どんなに惨めで荒廃した日々をすごしていたであろうか。椰子樹をたとえるのに沙漠の中のオアシスという言葉は私にとって全く誇張ではないのである。私が入会すると同時にあのいまわしい戦時となり、すべてが暗黒の中に包まれ、椰子樹も発行不可能となった。そして椰子樹の同人誌友の消息も知るすべはなくなったが、しかしいつの日か再刊される日を

（以下　半ページ欠）

（安部栄子の文）丘の裾引くところ……などとスラスラと出たものであった。それ迄は歌書も読んだ事もなく、小さな自分独りの周囲をながめ廻して、どうやら三十一字に作っていた我は、それ等のひろぴろと自由に詠まれた歌に対して、大きな驚異の眼をみわったものであった。

早速次号より出詠して岫雲集に載り、ソウソウたる吉本さん、葛西さんと並んだのであった。常時は何も判らず軸雲集がどの程度の手腕の人たちか、吉本さん葛西さん方がどういう歌人かもわからなかったが、今の老巧振りを思えば、うたった感慨無量な思いである。

創刊号は昭和十三年十月となっているから、戦時中の空白時代もあったわけだが、指折り数えて見れば、二十年の月日が経っているわけである。その間、この貧しい同人雑誌をまもり育ててまた中央同人諸氏の心労は、筆舌につくし難く、今更の様に感謝に堪えない次第である。

今五十号を迎えて、思われるのは椰子樹の上で結ばれた今は幽明境を異にしている人である。殊に惜しまれるのは岩波先生で、之は亦椰子樹につながる一同の思いであろう。

長い間、一貫して作歌に精進するということは、我々には仲々むずかしいことである。同じ煩雑な主婦の座に居て、創刊当時より欠詠なしに精進して居られる葛西さんや、また開沼さん方に対しては頭の下る思いである。再びはない自分の人生の中で味う哀歓や、けじめがないとはいえ春夏秋冬の周

囲のうごきなど、下手は下手ながら一つの歌にまとめて行く喜び、自分にはたとえ詠めなくても、短歌を味うことを知っただけでも幸此の上ないと思っている。

女の話はおしまいにはっきりと自分の事に落ちて行くときいたが、私も落ちる可きところに落ちたので、これでおしまいのわけである。今後ともわれ等の椰子樹の発展を祈ってやみません。

川原　比露思

今回椰子樹では、第五十号記念特集号を発行するに当り、回想録でもいいから書けということで、ペンを執ってみた。

吾らの椰子樹も早や五十号に達したかと思うと感慨無量である。今創刊号を開き見るに、岩波、椎木、花瀬、阿部諸先輩の詠革が貫禄を見せ、岫雲集に瀬崎、行方、武本、徳尾、葛西、開沼、坪内の外数人が名をつらねている。叉渓舟が「椰子樹が生れるまで」と題して随分詳しくその間の経過を報告している。

椰子樹発行の原動力が坂根氏と椎木氏にあった事は周知の通りであるが、同時に難航の椰子樹に在って終始推進力となった渓舟、由夫両兄の献身的努力を吾々は見逃すことが出来ない。

兎も角今回五十号を発行すまでに至った悦びは大きい。私は創刊号から読んでいるが、当時セントラル線の鐘ヶ江農場

に居て、創刊号を手にした時の何か心満たされたような喜びを記憶している。

作品を発表したのは第三号からであったと思う。岩波菊治選で、「川べりのいくりの上に物洗ふ女もの言へり声のさびしさ」外四首が掲載されたのが最初である。その後再びアグードスに帰植してからも作歌はつづけていたが、制作に心を打込むといった様な真剣味には欠けていた様に思う。然し号を追うに従って熱心になって行った事は事実であるが、環境には余り恵まれず、歌の本質など仲々つかめぬまま作歌をつづけ、椰子樹へも欠詠勝ちであった。然し我がまだ選歌欄でまごまごしている間に、現在なお作歌活動をつづけている葛西、吉本、開沼、安部、河本、井本の諸君は岫雲集に草々と名をつらね、ひそかに私は羨んだものである。当時中江、清谷、天津、脇坂君等もこの欄で活躍したものである。

ようやく私が宿望の岫雲集に自分の名を発見したのは第十号か十一号あたりからだった。第十一号に徳尾君の随筆「思ひ出」が発表され、あの文中のサンパウロ医大四年在学中に天折した私の弟を交えた四人の友情のこまやかさ、善良さ、叉筆者の豊かな人間味などもよく表現されていて、当時ある感激をもって読んだものである。今読みかえして見ても、その感激度は矢張り当時と変わらない。

鑑賞批評陣も仲々賑やかで現在なお女流歌人として活動中の開沼さんに選歌欄時代の私の作品を激賞され、甚だ恐縮し

ながらも何かひとつの作歌上の指針といった様なものを暗示された感じだった。毎号「歌友を語る」で親しまれていた池田重二君が、「植民短歌史概論」に熱筆を振ったのもこの頃で、興味津々たるものがあった。戦時中の空白を経て、スザノ近郊に移転するや、始めて岩波、瀬崎両先生にお会いし、叉中央同人や近郊の歌人達と交流するに及び、作歌上大きな刺戟と開眼を得たことは幸せであったと思う。戦後椰子樹の再刊と共に各地方の短歌熱も盛んになり、且つ、母国歌壇との交流などによって、わが伯国短歌の水準もある程度上昇して来ていることは否定できぬと思う。

五十号に達する永い期間に、吾等は岩波先生を始め、優秀な歌友を幾人も失った。然しながら、その作品はいつまでも生きて珠玉の様な光りを放っている。今度亡き同人達の作品を記念号に特集することは最も意義あることだと見う。

我は椰子樹が今後更に発展せんことを祈念して回想のペンを置きたい。

開沼　貴代

椰子樹もこの一月号で第五〇号の齢を量ねた。たかか五〇号ぐらいと知らない人は思うことだろうが、この五〇号にたどりつくのには、中間に第三次世界戦の空白時をはさんで創刊より実に二十年の年月を経てようやくたどりついたのであ

る。

当初より同人のはしくれとして加入して来た私には、真に感慨深く思われる。

椰子樹の中心的存在として歌友を導いて来られた岩波先生が、今もご健在で居られたら一同の喜びももっと深かったものと。先生の早逝がおしまれてならない。

椰子樹は時の総領事坂根氏や、リオに在った椎木氏などの後援に依って誕生したものではあったけれど、直接産みの世話より育ての親となり守のはぐくんで来たのは在聖の同人達であり、わけても徳尾武本両氏は創刊より戦後の再刊の後も現在に引続き編集発行の労務を担って来られ、その苦労はことばに尽くせぬものがあった事と感謝の思いを深くするのみである。

思えば遠い一九三七年八月、マリリア近郊アンデスに在った荒木八雲氏の、消息の一節に、阿部杜先生は去る八月早々に教育普及会社課長に栄転出聖されました。「煉原」第三号はいよいよ聖市より徳尾君らにも協力してもらい活字印刷にすることになりました。それで発行は少し遅れるかも知れません、とあった。当時阿部先生はアンデス日語学校の教師をしておられ、荒木氏と歌誌「燎原」を出していて、その第二号を発行直後に普及会入りのため上聖されたのであった。その時より既に阿部先生の胸中には、当時の歌壇（主として新

聞歌壇）の活発な動きに應じコロニア歌誌発行の計画を抱いておられたのではなかったろうか、その後「燎原」三号はついに発行されずにしまったが、三八年九月初旬に徳尾氏より、今度坂根総領事、椎木正金支店長などの後援で短歌雑誌を出すことになりました。来る十四日夜、聖市の同好者を最大限に動員し総領事と共に具体案を練るための懇談会を催す筈、発行は多分十月上旬になると思います。流派を問わず個人的感情に捉われず、同じ趣味に生きる人達が誰でも仲良く提携し合って、伯国に短歌を普及させたいと言うのが我々の主張なのであります。貴女も同人の一人に推してありますから至急歌稿をお送り下さい、とあり。十月四日のブラジル時報紙上で、「新短歌雑誌発行と聖市短歌会記」と題して徳尾氏が、その懇談会当夜の様子をくわしく報告されており、その予定どおり同月に全コロニア短歌同好者の待望と期待に應えて椰子樹は創刊されたのであった。

それから春風秋雨の幾星霜を送り迎えて創刊号に作品を発表した同人二十幾人の中、幾人かは逝きまた作歌を中止してしまった者も多ぐ、現在尚作歌を続けているのは当初の半数にも満たぬのではなかろうか。舊い歌友の名が椰子樹から一人また一人と消えていくのはそぞろに淋しい。併しそれらの歌友の空席は次々と進出して来る新人層に依って受けつがれ椰子樹は益々堅実な歩みをつづけつつあることは力強くも又たのもしく思われる。

「袖すり合うも他生の縁」と言う諺があるが、二十年もの長い年月を一つの道に心を寄せ合って来た同志と思うと、何か宿命的とも言うべきつながりの様なことなど考えられて、よぐぞこれまで倶にたすさわり来たものと沁々懐しまれる。お互い好きで入った短歌の道ならば、いつまでもともに手をとり合い相研磨し合って、この極みなき短歌の道を歩んで行きたいものと私は今も思っている。

葛西　妙子

バストスの山奥に住んでいた頃、はからずもブラジル時報で「初心者を導く」と云う渓舟の一語を発見し「それでは私でもよいのかしら」と恐るおそる教えを受ける様になった。元より歌誌一冊もなく家人が寝鎮まってから暗い土間のランプの下で、訳も判らす変てこな物を書いて投稿した。渓舟氏の錐の様な批評に涙をこぼしながら、それでも時には大きな活字で私の歌が枠の中に出ると、天にも昇るまでに喜んだ事をよく覚えている。

間もなく坂根総領事が着任され、歌人総領事でいます事が大変力強く感じられた。一方聖報紙上で椎木文也氏の歌が飛び抜けて光って居て、私は大好きで写し叉暗唱した。後日、正金のリオ支店長という立派な肩書きのある方である事を知って、非常に驚いたと共に安心した。

やがて待望の椰子樹は産声をあげた。坂根嵯峨氏の題字と、半田画伯の素朴な墨絵の椰子の表紙、その上品さはとても今日の椰子樹の比ではなかった。同時に短歌を始めて日の浅い私が、一躍同人に推挙されて非常に恐縮した。今日創刊号を手に取って懐しき云わん方なく、今回五十号を迎えるに及び実に感無量である。あの懐かしい坂根嵯峨氏や、岩波菊地先生を始め同人誌友には、己に故人となられた人多く、何時とはなしに歌から離れ去った人も亦多い。昭和十三年十月発行から、昭和三十三年の現在迄、正に二十年間、世は変還に変還を重ね、人の心も著しく変化して行った。

この間に、私は先生方の御導きに従って、無我夢中でひたすら歌を詠み続けて来たに過ぎず、何年になったかすら気にも止めず、いつか二十年を経過していたのには今更一驚した。顧みて、毒にも薬にもならぬ歌を、吾ながらよく飽きもせずに蒸し返して来たと云う一事のみ。然し下手は下手なりに、私の最善を尽くして来た事は確かである。よい加減に投稿したことは一度も無かった。

若し私が歌を作らなかったならばもっともっとつまらない人生であったろう。かの少しの曙光をも見られなかったバストスの山奥から、社交性の無い吾々が聖市に出てきて今日あるのは、全く私の歌の賜であると云っても少しの過言ではない。思えば十八年前、坂根嵯峨氏の送別歌会に、始めて出聖した日に、今日ある事が運命づけられていた。故に常に亡き

嵯峨氏に対して、感謝の念を忘れた事はない。実に私一家の運命は、この日から次第に好転し始めた様で、従って椰子樹にも大きなつながりがある様に思われる。

私は小俣修氏の「生命の一瞬を捉えて永久に自分という人間の姿を歌として残すという事になるのです。過ぎ去る事の早い吾々人生に於いて、その生命の一駒一駒を短歌として残して置く事が出来るのはどれ程の幸か知れない」と云う貴い言葉を忘れない。二十年間いろいろなことがあったけれども、ともかくも、只一途に精一杯に詠んで来た事は、私の生命の一駒一駒を無意識の裏に残した訳で、非常に有難く思っている。

さて創刊号を見て、最も大切に感じた事は、第一に「流派巧拙を問わず、同好者は全部、提携協調して進んで行く事」というスローガンを掲げて居るのが眼につく。皮肉にも、岩波、椎木、坂根、阿部の諸先生方は、いずれも流派を異にした方達であるにも関わらず、ひたすらブラジルの短歌の為にという大乗的見地から協調協力して下さった。又「個人的感情に捉われる事なく、主張は主張として紙上で、堂々論陣を張って頂きたい」とあるのに、いろいろな暗い憶測から、不快な事柄を醸し出すに至る等共に嘆かわしい限りである。

終りに、徳尾、武本両先輩の献身的、御努力に、満腔の尊敬と感謝を捧げると共に、心から椰子樹の永劫の繁栄を希つてやまない。

全伯短歌大会同人選高点歌詠草

第一回一九四九年二月十日

1　岩波　菊治

口汚く罵り合へる妻も吾も互に老けて耐へ性のなき

2　同作者

新しき世の勤きつつある時に吾が歌も思想も既に古きか

3　吉本　青夢

磯島の高処にひそむ海鴨の声ききをれば高み来る潮

3　清谷　益次

生ひたちてやがては人間の嘆かひをする日はあらむこの幼きも（わが兒一紀）

第二回一九五〇年八月二十七日

1　本田　笑山

うつしみのうれひも忘れこの海の悠久に変らぬ海鳴りをきく

2　吉本　青夢

打ちあげし芥を夕べ焼く煙なびかふ海に燈台ともる

２　岩波　菊治

きぞの風凪ぎにし朝の磯にしていくりを洗ふ静けき波音

３　中井　鐵夫

海鴨はかたみによりつ沖つ邊を磯島さして鳴き渡る見ゆ

第３回一九五一年九月二日

（この回より従来の全選による高点歌以外に同人選高点歌を設く）

１　西田　季子

謀られし口惜しさもやがて時経れば我が愚を責むる上にかへり来

２　武本　由夫

自負もなき教案に手間どりてゐる夜更け安けき妻の寝息きこゆる

３　武田　公平

思念幼き妻をひそかに憂ひつつ転地療養の事も決めたり

３　岩波　菊治

旋回しつつ降下し来り雲の中を出でしたまゆらよ傾く高層街

３　吉本　悟

むづかりて泣く背の兒に葱笛を吹いて夕餉の味噌汁を焚く

第４回一九五二年九月十四日

１　岩波　菊治

ただ一つ歌よむ事を拠り所としてこの国に生きて貧しかりし二十幾年

２　島田　普

社会機構の矛盾にも時に憤りてこの世に貧しく吾が生きてをり

２　中江　克巳

ガローアは夕寒々と降り出でて放送塔に時の間白し

３　阿部　パウロ

また今日も荒磯の岩にかがまりて海苔採る女は暮るるまでをり

３　清谷　益次

常にわが意識し自ら蔑める性格をあらはに夢にあらそふ

第五回一九五三年八月二十三日

1　戸崎　清作

蠅一つ熟睡の友の頬にゐて遠いかづちの鳴りてゐる午後

2　阿部　パウロ

凪ぐ今日の明るき海にこだまして射撃は続く磯の山より

3　中江　克己

ブレージョの航空燈に灯はともり沼の夕霧岸移り行く

第六回一九五四年九月十二日

1　中田　武男

空洞の位置などひとり思ひをり痰の出やすき横向きに寝て

2　簀藤　勝子

母我の丈より伸びし娘とおれば厨が挟くなりたる心地す

3　戸崎　清作

秋の蝉ひとつ鳴きゐてユーカリの木の上の空つねより高し

第七回一九五五年九月十八日

1　清谷　益次

母の柩に土盛られゆく時すらも泣かごるほどに子らの幼なさ

２　中田　武男

夕焼の空に飛び交ふつばくらを見つつし試歩の息整ふる

２　阿部　パウロ

術もなく狂へる母を宥めをり互みに惨めをさらし合ひつつ

３　武本　由夫

市長候補の肖像ふるびし見通しの塀さむざむと雨にぬれゆく

３　矢失　坂行男

利害なき範囲が友情の限界と知らされし今宵ひとり酔ひたり

第八回一九五六年十一月四日

１　八巻　梅夫

音たてて風すぎゆけり人夫らがビラ貼り急ぐ夜の板壁に

２　吉本　青夢

かたへにて少女は刺繍の布ひらく午過ぎて店のひまとねる時

３　長友　安徳

病癒えて一月振りに来し校舎に秋の陽のさす位置変りたり

３　米川　久

珈琲をわかす朝の火明りにかがみて足の砂蛋をほる

第九回一九五七年十月十三日

１　春名　景水

支へきし君の命のたえてなほ補給酸素の気音泡たつ

１　星野　忘勿草

投売りの靴の中より結局は修繕のきく型を選べり

２　平松　霞

驕ぶりて言ひしを悔ひつつ夕庭にかがまりて茶のこぼれ実拾ふ

３　則近　正義

対岸の岬の岩に夕づきて角度変りし日が直射する

３　弘中　千賀子

無視されしとは思ひたくなし秋の陽がシャボンの泡にこまかく光る

パウリスタ新聞社主催の第十回全伯短歌大会は、今年の八月末日、移民五十年祭を祝して盛大に挙行される。締切りは七月十五日、未発表作品二首をパウリスタ新聞社宛に送付ありたし。

刊行におくる

武本　由夫

椰子樹五十号記念として、歌文集を刊行したいという企ても二年越しにやっと実現すると言う。私にも何か書けという注文であるが、実は私には何も書くべきことがないのである。というのは、創刊以来誌上にモノを書いたのは、恐らく私が一番多いのではないかと思われる程で、今更という感じが無いでもない。そして私の或る時期は、椰子樹が私自身でさえあったと言えるかも知れない。発行が遅滞してやっと年間三回に過ぎぬ時代もあった。又戦争に出合って休刊したこともあった。調子よくいったと言っても年間五回を出ない発行ぶりも、何だか私自身の苦渋に充ちた精神と関係の生き態にも似ていて、語れば総べて恥ずかしくも又味けないもののように思われてペンを執る気が進まない。

只一つ、椰子樹とつながりを持って、私が手ばなしで、うれしいと言えるのは良くも悪くも、歌作りの中に最も親しい友が多いということである。創刊当時から、徳尾、吉本、中江、池田、住吉、富吉など、只やみくもに歌の議論ばかりしていた相棒が、今日まで、良いにつけ悪いにつけ、励まし、叉叱ってどれ程私の心を豊かにしくれているか知れない。こうした良友（或は悪友）を失わない限り私は短歌を作りつづけていくにちがいない。

東の海の渺たる島国日本が、二千年来はぐくんで来た微妙な詩型が、ブラジルで、なお生きつづけているということを考えると、下手とか上手とかいうようなことは余り問題ではない。椰子樹は、もともとそうした事は抜きにして、何かの因縁で、この詩型の好きな者が集まり、お互いの生活の中にひらめく一瞬の生を、この詩型によって捕らえ、その中に永遠なる生命を見い出すことによろこびを持とうということだけの事である。或る時は苦しんで短歌を作り、或る時は短歌をつくることを楽しんでいきたい。

椰子樹が、そうした者共通の工場として号を重ね、何時までも続くことを私は願っている。その外に何の願いがあろうか、何もありはしない。

編集余録

▽椰子樹の五十号記念の刊行は一昨年十一月に多数同人の参集の上で企画された。その後、別冊として出すことに変更を見たが、いろいろの事情から、いつかな日の目も見ずに、ずるずると一か年を過ぎてしまった。

▽そこで刊行を少しでも早めるためにと、誰よりも時間的に自由という理由から、編集をぼくの方に押しつけられた。もともと好きなぼくのこと、心よく受任したものの、まず諸作品の集っていないのは予想外であった。

▽これでは手のつけようがない。そこで各新聞紙上でひろく募集をおこない、重ねて数氏に寄稿を依頼して、やっと五月に入ってから編集に着手したわけである。

▽どうせ五十号記念として刊行するからには、それにふさわしい内容を盛らねば意義がない。その点、できるだけ努力したが、気に入ってもらえればさいわいである。

▽執筆陣に名をつらねた人々は、椰子樹創刊当時より関係の深い同人である。いずれも思い出を語る好品ぞろいで、読者の興味をそそるにちがいない。各人にペンの労を感謝する。

▽ぼくに与えられた題目は、「椰子樹五十号までの作品統計」であったが、執筆者の徳尾渓舟、武本由夫が多忙のため、代ってその担当の経過と動向の面を、杜撰ながら概史として書き加えた。さらに別稿に全文章を調査して掲載したが、こ

うした資料もあって参考に役立つだろうと思う。
▽一般よりも募集した記念号讃歌の二首は、掲載を一首にとどめ、これを同人、その他に分けた。配列はＡＢＣ順。
▽その代りに旧、現同人作品をもれなく抽出した。別に秀作を選んだわけではない。すべて椰子樹誌上より、ぼくのチェックしてあった歌を、初期より再録したものである。
▽これに対して、不満の同人もあるかも知れないが、募集しても応じてもらえないのだから、まして自選歌を依頼してもむだである。それよりこうした古い自作品に、思い新たにしてもらいたい。二部とも発表号の順にしたがつた。
▽物故歌人作品集は、当初より重要なるプランの一つであった。しかし同人に限定したのでは、片手落ちの感をまぬがれない。ただ一回の投稿者でも、椰子樹を愛した歌人である。ここに更めて全物故者の冥福を祈る。
▽さらに故人の略歴を付記した。多くは椰子樹誌上の追悼文などで調べ、他は遺族や知人に問いあわせたが、その半数は返信に接せず、したがってぼくの知り得る範囲を出ない。こうしたことは、急場になって不備をかこつより、その逝去のつど、刻明に調べておくべきであろう。
▽今までに発行された歌誌と歌集を紹介した。他の全伯短歌大会と、全伯短歌コンクールの各回の高点歌詠草とともに、一目瞭然を得て、便覧の用をなすものと思う。
▽ことしは移民五十年祭にあたり、椰子樹の五十号を重ねる

とともに、創刊より二十年を経ている。また言えば、故岩波菊治の生誕六十年にもなるし、全伯短歌大会は第十回を迎えるなどと、俗っぽいことながらおめでたいかぎり、その時に編集に当面したぼくの意義も大である。

▽なお会計について伝えておく。この紀念号別冊は既報のとおり一部百クルゼイロとなっており、いずれ各新聞紙上でも通告するが、未納者は直接左記へ申し込まれたし。

MORIHARU NAKAE R.Teodro Sampaio,2766 Pinheiros S.Paulo

なお知友の一人でも多く勧誘をお願いする。

▽再び間部学画伯をわずらわして、ますます円熟せる手になる独自の表紙画を得た。記念号は一段と新味を添えた。誌上をかりて深くお礼申しあげる。（青夢）

発行所　聖市セナドール・フェイジョ街二九番
五階五一五号室
電話　三五ー七七〇八
一九五八年六月印刷発行　椰子樹五十号記念別冊特集号
印刷所　聖市オスカル・シントラ・ゴルジンニョ街四二番
電話　三六ー七九六七